
白蒼月外伝～二つ月の見る世界（種シリーズ）

汐井サラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白蒼月外伝「二つ月の見る世界（種シリーズ）」

【Nコード】

N5907M

【作者名】

汐井サラサ

【あらすじ】

白蒼月紅譚「二つ月のある世界」

<http://ncode.syosetu.com/n333871/>

その舞台となった剣と魔法と素養の世界。

白い月と青い月二つの月が浮かぶシル・メシア。

そんなに昔ではないけれど、ほんのちょっとだけ過去のお話。

主要人物として登場してきた

騎士：アルファルファ

術師：カナイ

王子：エミリオ

種屋：ブラック

彼らが出会う少し前の物語……。

本編：白蒼月紅譚〜二つ月のある世界 読後の方がより世界観
が分かりやすいかもしれません。
今後、増話可能性があります。

第一話：騎士の本願―前編―

―― …… 大儀なき武力は暴力に他ならず、決して行つべからず

……

僕はまだ子どもで教わったことをそのまま鵜呑みにすることしか出来なかった。だから自分より下位のもの、無力なものへの応戦はしてはいけないものだ和我慢した。

「……っ痛」

「アルファルファは、訓練でも試験でもトップなのに実践では無力なのだな？」

歳の離れた同じ階位生クラスからの仕打ちを手当てしてもらつと必ず掛けられた言葉。

「やはりまだ子どもだな」

僕はその言葉を否定することも、教えを破ることも出来なかった。だから僕は怪我を放置気味になっていた。

常に体調は万全でなくてはならないのに、満身創痍のまま実習に立つこともあった。でも、僕は誰よりも強かったし誰にも負けなかった。

その日は、騎士塔に訪問者があった。

大聖堂の生徒が治癒術の実習を兼ねて、騎士塔学生健康診断をするそうだ。大聖堂の生徒は女性が多かったし華やかな人が多いから騎士塔は賑わっていた。

「……なんで子どもがいるんだ？」

時間で割り振られ、自分の順番になつてしまったので渋々その席に着くと、開口一番の台詞に眉を寄せた。

だけど僕は、顔を上げた先の大聖堂学生も自分とそう変わらない年代に見えてワザとらしいくらいに大きく瞬きをしてしまった。

「貴方もそんなに変わらない」

「オレ？ そうだな。確かに変わらない。でもオレはもう最上級階位だし、今日の引率を任されてる。まあ一応責任者だ。だから、自分の管理すら行き届いていないお前とは違う」

こつこつと机上の紙を弾きながら、面倒臭そうに口にする彼に僕はぐうの音もでなかった。

「王宮は閉鎖的だからなお前みたいなのは苦勞するだろ？ まあ、部外者のオレがとやかくいえることじゃない。今オレに出来るのは……」

うーん……と、名簿を指で撫でながら僕の名前に行き着いたのか、コツコツと二回打つてにやりと得意げに口角を引き上げた。

「アルファルフア、運が良いな。オレならかすり傷一つ残さず治してやれるよ」

呆れるほど自信家な大聖堂の生徒はいつでも呼べといったくせに名前も告げなかった。

「馬鹿だよ……」

ぽつと零した僕の独り言は誰にも……きつと、届かない。でも久しぶりにかすり傷一つない身体は軽くて気持ちも軽くなった気がしていた。

それから程なくして僕は最上級階位への進位試験資格を得られた。大抵の生徒は、十年以上の騎士塔生活でようやく得られる資格だけど、僕はそこまでの階段を五年で駆け上がった。

騎士塔を出て王宮内の一角で僕は時間を潰すことが多かった。

友人と呼べる人も居なかったし、何より無駄な争いの種に僕自身なることを良く分かっていたから。

そこは騎士塔も王城も見渡せて遠くには聖域も見ることが出来る。小高い丘になった場所で、物見の塔の最上階くらいからじゃないと見つけられないような場所だった。

僕だけの場所だったのに、ごろりと横になった僕の顔を覗き込んできた人物が居た。

最初は影になって分からなかったが、僕が身体を起こすのと同時に姿勢を正した人物は背にした青空を映したような髪の色をしていた。

力強い意思を感じさせる瞳は僕がさっきまで背にしていた青草と同じ色だ。鮮やかなその姿に僕は刹那時を止めた。

「君がアルファルファ？」

ここは王宮だから身なりの良い人は山ほどいるけど、僕の前に現れた人は品も良さそうで、僕は直ぐに王族に席を連ねる人だろうと思った。

丘の上にある巨大な夢見草の傍で寝転んでいた身体を起こしただけだったので、慌てて立ち上がり腰を折る。

「ここは城内じゃないし、君はまだ騎士じゃない。王宮仕えじゃないのだから気にしなくて良い」

いわれて「はいそうですか」と、頷けるほど僕は子どもでもなくてますます身を固くした。

「君、学園を出たらさ。私の近衛にならないか？」

突然の言葉に僕はとても間の抜けた顔をしていたのだろう。そんな僕を見て彼はとても楽しそうに笑った。

「私の名はセルシス。いや、名前なんてどうでも良い。今は王位継承順位第三位の王子だ」

それじゃあ頼んだよとセルシスと名乗った王子は勝手に締めくくって僕の前から姿を消した。僕は身じろぎ一つ出来ずにセルシスが去っていったほうを見送っていた。

僕の家は騎士を多く輩出している家系で、王族直属の近衛兵についているものも少なからず居て……だから王位継承権の近い王子から直々に指名されることがどれほど名誉なことか、心が震えるほど

良く分かっていた。

僕は浮き足立っていたのかも知れない。

出る杭は打たれる。

僕が最上級階位進位資格を得たことを面白く思わない同階位生に絡まれた。

「お前本当に使えるのか？ お遊戲みたいな型通りの剣術じゃあ、何の役にも立たないだろ？」

剣は使わない。

でも確実に苦痛を与える拷問術に近いものを受けた。

避けることも交わすことも出来ないわけじゃない。だからといってこの場を逃れてもこの手の輩は陰湿だから執拗に追い詰めてくるだろう。

今、このとき堪えてやり過ごせばいい。

そう思って僕は堪えた。

口の中に血が溜まりもう一度腹部に蹴りを受けると石床を血で染めた。あばらが三本くらいは駄目になってる。このまま意識を手放してしまえば次に目を覚ましたときには医務室の天井を見上げているかも知れない。

でも僕は頑丈で、このくらいでは倒れることは出来なかった。

気を失う様子のない僕に痺れを切らせた同階位生はこともあろう

か剣を抜いた。刀身が空を切る聞き慣れた音と動きを感じ反射的に僕は剣を抜いてしまった。

僕も重症を受けたけど相手ほどではなかった。
彼はもう二度と立つ事も剣を振るうことも出来ないだろう。

―― …… ただ息をしているだけの人形になった。

僕はその一件の責を問われ試験資格を失った。
もう永遠に得ることは出来ない。

失意の底の僕をさらに落としたのは、王宮からの退学処分だった。
僕が勝手に言い掛かりをつけて彼に剣を揮ってしまったことにな
っていたらしい。僕はちゃんと嘆願したけど騎士塔に僕の味方は誰
も居なくて、僕は騎士塔を追われた。
母はそんな僕でも優しく迎えてくれたけど、父は顔も見せてはく
れなかった。

「お父様は貴方に特別期待をされていたから」

母の言葉が僕に追い討ちを掛けた。
僕は父の期待に応えることが出来なかった。
それどころか、これでは伝で騎士職に就けたとしても上の任に就
くことは出来ないだろう。

家にも居た堪れなくて僕はよくふらふらと外出した。
遊びに出ているというよりはもう日常の一環になってしまってい

る稽古を一人でやっていた。

そんな生活が暫く続いたある日家に王城からの遣いの者と書状が来た。

「……僕を王城へ？」

書状は僕を騎士団へと向かえることと、王子の護衛につくことが書かれていた。署名はセルシスとなっている。その名に父は少し苦い顔をしたものの、もう諦めかけていた息子の道が開けたことを喜んでくれたのだと思う。

僕はそのあと直ぐに王城に勤めることになった。

「や、少年。凄い騒ぎになってたな？」

騎士団に入ると学生のように無駄に絡まれることはなくなった。だけど年齢差からか特に親しくするものもなく、僕は独りで居ることが多かった。

そんな僕に声を掛けてきたのは空色のセルシスだ。

「王子！ この度は過ぎたお引き立てありが……」

「いい、いい。やめておけ。私は確かにここにお前を引き立てたがそれがお前にとって吉と出るか凶と出るかは分からないだろ？」

僕には王子がどうしてそんなことをいうのか分からなかった。

そんな僕に王子は自嘲気味な笑顔を浮かべて自分の髪と同じくら

い青い空を見上げた。

「私は今王位継承順位こそ近いが第四寵姫の子だからな。お前も私も過ぎた素養に振り回されるな？」

王子はそういつて笑ったけど泣いているのかと思った。

僕には王族間の揉め事は良く分からなかった。

首を傾げた僕に、王子は気にするなと頭を撫でた。

そして王子は直ぐにその場をあとにしたけど僕は撫でられた頭を抑えて暫くその場に立ち尽くしていた。

こんな風に僕に触れる人は母以外に居なかったから。

第二話：騎士の本願―後編―

二年ほどして僕はセルシス様に近衛隊長まで引き上げられた。

僕はとても嬉しくてセルシス様にご挨拶とお礼を告げに執務室に失礼した。

セルシス様は僕を招きいれてくれたけど何か考え事をしているようで僕の話は上の空だった。一通りの挨拶が終わって失礼しようと思ったら、セルシス様は人払いをして窓際へ立つと僕を傍へと招いてくれた。

「あの、セルシス様？」

「名を呼ばなくて良い。私は王子だ。王子と呼ばば良い」

「は、はい！ 申し訳ありません」

叱責を受けたのだと思い、即座に謝罪した僕にセルシス様は寂しそうに微笑んで構わないと首を振った。

「怒っているのではない。ただ、私の代わりは居る。お前は私が居なくなっても今後王子に仕えるだろう。私が私である必要はここではない。私は王になる素養を持っただけの男に過ぎない」

「セルシス様。そのようなことは」

「王子と呼べ。お前は大儀を護れる。己が身、傷つこうとも信念を貫ける。お前のような者を側近につける者は皆安泰だろう」

「そのようなことは」

「謙遜するな。そうでなくては私はお前を引き抜いたりはしない。私は知っている。お前の受けていた処遇を。お前は耐えただろう？心を折らなかった。今後お前は最上級階位を取得していないというハンデはあるだろうが、その程度のことを気にする輩の下には就

くな」

護るはずの相手に僕は護られていた。深い安心感と安堵感を与えられ満ち足りた。王になる素養の一端に触れていたのかもしれない。

「だが、私に就くときは私の命に忠実であれ。私の命令は絶対だ」

分かったな。と、念を押され僕は至極当然と腰を折った。
セルシス様は「絶対だぞ」と念を押して頷くと話を続けた。

「お前の初めての役目は明日からの私の視察に同行することだ。長期でも長距離でもないから小隊だけだがお前が居れば退屈はしないだろう？」

「……護衛、ですよね？」

「もちろんだ。だが馬で行くし話し相手もいなくては退屈してしまう。馬上では居眠りも出来んしな？」

明るく笑った王子に僕は、曖昧な返事を返すしかなかった。
でもそのあと至極真面目な顔に戻って僕に命じた。

—— ……道中何が起こつても深追いするな。死ぬなと……。

その視察の帰り、突然降りだした雨の中、王子は闇猫に撃たれた。

『私の命令は絶対だ』

『私の名を呼ぶな』

『私の代わりは幾らでも居る』

王子は暗殺計画があるのを、闇猫に手が回ったことを知っていたのだと思う。

僕は王子の命がなくなると動けなかった。
王子を救うことなんて出来なかった。
なのに王子は僕に命じた。

―― …… 僕が死なない為に……。

―― …… 雨は嫌いだ。

あの日のことを、思い出させるから。

「大切な人だったんだよね？」

僕に泣かないで、と、いいながら自分が泣きそうな顔をしてそう
いったのは彼女が初めてだった。それが凄く嬉しかったのに、僕は
否定した。

最初の任務で主を失ったこと。

もう僕に命を預ける馬鹿は居ないだろう。このまま埋もれてしま
うのも王子以外に就くのもまだ考えられなくて、僕は騎士団を抜け
る為に詰め所に向かうと来客中だった。

団長と顔を合わせていた人物は僕を見て「君を待つて居たんだよ」と微笑む。正直胡散臭い男だと思った。でもやめると伝える機を逃した僕はそのままその男についていった。

道々彼は何もいわなくて僕も何もいわなかったし聞かなかった。ただ久しぶりに回廊を顔を上げて歩いた気がする。

「あの」

「もう少しだからついてきてくださいね。君の新しい主人のところへ案内しますから」

「主人？ 私は暫く誰の下につくつもりもつく資格もないと……」

「おやあ？ そんなこと誰が許可したんですか？ 君はまだ騎士団所属。上の命令には逆らえないはずですよー」

意地悪く瞳を細めてそういった男に僕はくつと息をつめた。

その様子を男は楽しそうに眺めたあと、ふふつと声を上げて笑うと「そう、身構えないで下さい」と締めくくった。

どこまでも歩いて最終的に城を出てしまったから、声を掛けたら振り返ることもなく、男は「城からなるべく離れたほうが良いんです、気が楽で」と陽気に答えずんずん歩いていく。

何というかこの人には逆らえないような気がする。

新しい主人……気の毒に、僕なんかを傍仕えにしなくてはいけないなんてきつと呪われたようなものだ。僕が自虐的な笑みを浮かべると突然視界が開けた。

城の裏手にある庭だ。

こんな所に足を踏み入れる機会がなくて知らなかった。

騎士塔から出たあの場所の他にこんなに穏やかな場所がこの王宮にあったなんて。

緩やかに昇った坂の上にあるポーチに人影が見える。

城側から歩いてくる僕たちを見つけたのか、人影はこちらに向かつてゆつくりと歩いてきた。

その姿が確認できる距離に来て僕の足は動かなくなった。

『私には心を病んだ母と歳の離れた弟が居る。お前よりは少し上かもしれないが、私よりもお前のほうが歳が近いだろうな？』

空の色を映したような髪の色。

若い芝を思わせる柔らかな瞳の翠。

動けない僕の双肩を掴んで案内してきた男はずいと僕を前に押し出した。

「騎士団から攫ってきましたよ。アルファルフア君です」

「宜しく、アルファ。僕はエミリオ。エミルと呼んで欲しい」

セルシス様の力強い笑顔とは全く違う柔らかな笑顔。

でも僕は間違えない。

この方はセルシス様の弟君だ。

たった一人の兄を護りきれなかった僕に向けられた笑顔、躊躇する僕の前に迷いなく差し出された手。

「僕は……」

その手を取ることが出来ずに遅疑逡巡してしまう僕に、エミル様

は差し出していた手をずっと僕に伸ばした。対応に困って対峙した相手を見上げると、エミル様は僕の不敬を気にするでもなくやりわりと微笑んで「握手」と風がなるように優しく囁いた。

どうして良いか、分からずに、でも伸ばされた手をそのままにもして置けなくておずおずと持ち上げた僕の手をエミル様は強引に取ると空いていた手を重ねて包み込んだ。

「大丈夫」

「え？」

「大丈夫だよ。君は素養に振り回されているだけだ。それにこの手は君の努力を物語っている。僕では君の主は務まらないかも知れないけど、肩を並べるくらいには足るだろう……だから……僕を信じて。大丈夫。たくさん話をしよう」

ぎゅっぎゅっとな手を握ってあのときの感触を確かめる。

あの人の強い瞳に憧れた。

でもその中であつた優しさだけを抽出したようなエミルの手を取ったあの瞬間から僕はエミルの、彼だけの騎士になった。

彼の護りたいものの全てを護る騎士に……そして初めて出来た友達に僕はこれから先の話をした。

第三話：術師の慢心―前編―

「勝者！ カナイ」

沸きあがる歓声は俺を捕まえることなく、空疎な心の中を勝手に通り過ぎていく。

詠唱破棄も出来ないような上級階位の術師なんて話にならない。模擬演習でも実習でも俺は負け知らずだったし失敗知らずだった。

詰まらない。

くだらない。

馬鹿馬鹿しい。

大聖堂に入学が認められてから全てが単調だった。

どうして出来ないやつが居るのか分からない。

どうして失敗する奴が居るのか分からない。

呪文を詠唱したり、構築式を書き連ねたり世界に属する精霊の力を借りたり……それらを使役し行使するだけだ。

至極簡単なことだ。

「カナイさん！ 今日もカッコイイっ！！」

「……お前な」

チビでガキで獣族で……いつだったか俺の後ろばかり付いてくるようになったシュシュ。

獣族でもあるから素養は特出していたが、そういうわけか伸び悩んでいて未だに初級階位だ。

それなのに不満ばかりで満ち足りることのない自分とは対照的に、シュシュはいつでも満ち足りているようで時にはその存在に苛々することもあった。苛々しながら、後ろをぱたぱたついてくるシュシュを振り返ることもなく廊下を闊歩しているとパチパチパチと可愛らしい拍手が聞こえた。

俺がそれに気がつくと廊下の先に居た男はニコニコと馬鹿みたい
に笑顔で歩み寄ってきた。

「凄いな！ 君。僕と同じくらいなのに上級階位を取ってるなんて！ さっきのも見えたよ」

俺の後ろに居たシュシュが追いついてきて俺の陰に隠れる。

対峙した男はにこりとシュシュを覗き込んで「こんにちは」と重ねたがシュシュは、類稀なとつたくなるほどの人見知りだ。俺の胸くらいまでしか背丈のないシュシュは、びくりつと肩を跳ね上げて人のローブの中にまで入り込んでくる。

—— …… 迷惑だ。

俺は、はあと溜息を吐いて「こいつのことはほつといてくれ」と口にすると男は視線を俺に戻して「分かったよ」と笑みを深める。

「……それで部外者が何でこんな所に居るんだ？」

「僕？ 僕は先生についてきたただだよ。演習をやってるから見てきたら良いよっていわれて見てたんだ」

鬱陶しい。

俺がそいつに対して一番最初に持った印象だった。

人懐っこい笑顔で、ただそこにあるだけで、皆に望まれる太陽のような姿に苛々した。家族という狭い枠の中だけでも望まれることのなかった自分と余りにも対照的な存在に感じた。

「上級階位ってことはそんなに遠くないうちに卒業しちゃうよね？
そのあとどうするの？ やっぱり王城勤めを考えてる？ だった
ら」

「五月蠅いな！」

「え？」

「五月蠅いっていったんだよ！ 俺は城勤めはしない！ 絶対にあんなところへいくもんか！ あんな閉鎖的なところ、息が詰まる。生殺しにされてるような気がする。気が、狂いそうだ」

怒鳴った俺に気分を害した風もなくそいつはにっこりと笑みを深めてこともあるのか頷いた。

「僕もそう思うよ」

あっけに取られた俺にそいつは変わらない笑顔を向けた。

「僕はエミルだよ。君は、カナイだよ。僕が王宮を出たら一緒に何かやるう？ 君の知識欲を満たせる何かを考えるよ」

任せて、と、ニコニコするエミルに俺は益々不機嫌な顔をしたがエミルは毛ほども気にしていないようだ。

変な奴。

あまりに馬鹿馬鹿しくて、勝手にしろ、と、いい残しその場を離れると途中でまた関係者外と擦れ違った。

俺と目が合うとそいつはにっこりと胡散臭いくらい、綺麗な笑みを浮かべて軽く会釈し通り過ぎていく。

エミルがいった『先生』とは恐らくあいつだろう。

あの顔は知っている。

現王の執政官の嫡男だ。パレードか何かで見かけた。

物凄く退屈そうなくせにその顔には笑顔の仮面をつけて腹の底の知らない奴だ、と、思ったのを良く覚えている。

ぎゅーっと俺のローブの裾を握ってずっと黙っていたシュシュは、やっと人心地ついたのか、俺から手を解いてはあと深呼吸した。

栗色の髪と同色の猫耳が上下する。

「カナイさん。さっきの人、王子です。それから、今擦れ違った人……」

「お前は見る目のほうがあるんじゃないのか？ 治癒師階級を選択するより未来見とか……ん？ 王子って、エミルがか？」

説教めいたことを口に仕掛けて俺はシュシュを振り返る。

シュシュは少し迷ったようにしたあと確信を持ったように頷いた。

「上手く隠してありました。でも王子です。出自は隠せても素養は隠し切れない」

「だとしたら王宮から出るなんて叶わないだろ？」

エミルが話していたことを思い出して俺は鼻先で笑った。それなのにシュシュは珍しく難しい顔をして眉を寄せていた。

俺はこのときのことか印象深くで忘れたことはなかった。

しかしあれ以来一度もエミルが俺の前に現れることもなかったし、シュシュがその話題を持ち出してくることもなかったから次第に記憶の底へと沈めてしまっていた。

十六になる頃には最上級階位も卒業した。

そのあと別に何か目的があったわけではないが、最上級階位の頃に知り合いになったクルニアという胡散臭い男に誘われてそのまま大聖堂の研究室に入った。

本当なら最上級階位になるとき下級階位の面倒からは解放されるのがルールだ。俺もなんだかんだと抱え込まれていた十二人の下級階位生徒を次に引き渡した。

それなのに最後の十三人目のシュシュだけがどうしても、頼み込まれて仕方なく引き続き面倒を見ることになり相変わらずシュシュは俺の後ろをついてきた。

未だにシュシュは下級階位だ。

「触るなっ！」

叫んだが遅かった。

シュシュは研究室の長テーブルの上に置いておいた魔法石を床に落とした。派手な閃光が迸り、建物全体が揺れたのではないかという震動を起こす。

もくもくと室内を占領する白煙に俺は口を塞いで窓を開け放った。咄嗟に室内は困ったから外にまでは影響していないが室内は惨憺たる状況だ。

「ぐぐ、ごめんなさいっ！ カナイさん大丈夫ですか？」

「シュシュ……ラボの物には触れるなといってるだろ！ ……ったく、怪我しなかったか？」

煙を室外へと追いやつてようやく確認できたシュシュの姿が五体満足だったので一応胸を撫で下ろす。

「おいおいおい、今の何だよ。シュシュがまたなんかやかしたのか？」

がらがらと引き違い戸を無造作に開け放ち、銜えタバコのまゝ研究室へ入ってきたクルニアはワザとらしく片手を振って煙を掻き分けるしぐさをする。

「なんでもねーよ。ったくお前がサボってるからだろうが」

「あんなー。稀代の天才術師さん」

いつて俺の肩を抱くクルニアはタバコの臭いが身体に染み付いていて、自然と眉を寄せてしまう。そんな俺に気がついていながらクルニアは気にすることはない。

「俺がお前をここへ巻き込んだのはー、俺がサボる為。俺がいくつだと思ってるの？ 年寄り使うなよ。だから俺は居なくて当然だと思ってもらわないとなあ」

こっついう奴だ。

「……公金泥棒」

「あっははは。結構結構。こんな研究進まなくて良いだろ別に」

ばしばしと遠慮なく俺の背中を叩くクルニアから逃げるように、シュシュは散らかった室内の片付けを始めた。シュシュはクルニアが苦手だ。その気持ちは良く分かるから改善を求めたことはない。

「お前もいつまでも男のケツ追い掛けてないでさっさと昇位試験受ければ？」

床にしゃがみ込んでごそごそとしていたシュシュを、こつんと弾いたクルニアはにやにやと笑っている。

「……こいつ男だろ？」

「お前も男だろ？」

「……だったらそーいういい方しないだろ！ シュシュも赤くなるな」

「仕方ないだろ？ 将来有望な天才術師さんはモテるのに遊ぶ気配もないしこないつまでたつても伸びないちっこいのを連れてたらそっちかと思われても」

そっちつてどっちだよ！ 俺は額に青筋が浮かぶのを感じたが何とか堪えた。それに

「こいつはこいつなりに頑張ってる……と、思う。これから伸びるか伸びないかなんてものをお前に決め付けられる謂れはない。お前だって室長の話がきてるのに蹴ってるって聞いているぞ？ 独立すりゃ良いじゃねえか」

「えー、俺？ 俺は誰かに使われてる方が性にあってんの。誰かに責任押し付けられない立場になるのは嫌ん」

おっさんがくねるな。

こいつと話をしているとどつと疲れる。

黙々と片付けをこなしているシュシュを眺めて確かにこいつも困りものではあるなと思うと眉間のしわが増えた気がした。

—— …… なんだコレ？

研究室から自室に戻ると何も出しつ放しにはしていなかったはずの机上に、古ぼけた本が置いてあった。

ご丁寧に鍵まで掛かっている。

若干崩れかけた表紙を手でなぞると書かれている文字が明らかになる。

「……これ、は」

どくんつと心臓が脈打った。

緊張とある種の喜びに指が震えながらも、もう一度確認するように文字を撫でる。

ふーん……と、掛かっている鍵を弾くと挑戦的な気分になる。

この程度の封印を俺が解けないはずはない。
幾つか簡単な開錠の術を掛けたが開かない。
解けない。

それが俺の気持ちを高揚させた。こんな気分は久しぶりだ。

――…カチャン…

小さな開錠音が鳴った。

思っていたよりも時間は掛かったが楽勝だった。少し残念だったが並みの術師なら困難だっただろうということは簡単に想像がつくから、まあ、いい。

そしてその本の中身に、ある種の確信を持って表紙を開く。

多少痛んではいたもののこのくらいなら読み解ける。俺なら出来る。そう思った。

俺は椅子を引き机に腰掛けると、次々とページを捲り中身を簡単に読み解く。

俺の予想通りそれは図書館にしか所蔵されていない。

しかも一般人はもちろん生徒や教師の図書館関係者でも閲覧すら出来ないところに保管してあるといわれる禁書の物だ。もちろん俺自身それを見るのは初めてだったが、その書かれている内容の危険さに直ぐにそうだと思いついた。

「こんなもの、一体誰が……」

ボタンと重い表紙を下ろすと埃が机の上を滑る。

椅子の背もたれに体重を預けるとぎしりと軋む。

高い位置にある月は何時もと変わらない状態で夜を明るくしている。

変わることはない二つ月。

変わることはない自分。

このまま何も変わることなくただ漠然と上のいうものを研究し続け得た答えはきっと争いの種になるだろう。

だからクルニアはだらだらと時折失敗を起こして引き延ばしている。そんなことすぐに分かった。世界の均衡が崩れれば、争いが起これば俺やクルニアみたいな奴は引つ張りダコだろう。

そんな世界はくだらない。だから俺もクルニアの失敗に付き合っ
てやる。

その所為で満たされない欲が俺の中でいつも燦っていた。

禁じられた術にはそれなりの理由があり、今日の前にあるそれも理由は明らかだ。こんなものを操る奴が居れば……世界の均衡は保てない。

—— ……それに、リスクも、高い。

第四話：術師の慢心―後編―

「カナイさん、最近ラボに顔を出さないからクルニアさんがサボれないと怒っていましたよ？」

「たまには真面目に常勤しても罰は当たらないだろ？ あいつは普段サボりすぎだ」

濃い目の紅茶をことんと俺の机の端へ置き「何をやっているんですか？」と、机の上に開いていた本を覗き込む。

俺は置かれたカップを持ち上げ口を添えながら「古文書の修復」
とだけ答えた。

別に嘘をいっただつもりはない。本当のことだ。禁書は判別できない文字があちこちに散在していた。それらを修正するくらいなら俺は作業していた。

文字は古代文字だったし、シュシュのような初級階位の生徒には読むことも間々ならないだろうから、シュシュの前で作業を続行することに戸惑いはなかった。

「随分難しい作業なんですネ」

「あ？ 何で」

「カナイさんがこんなに資料を必要とする文書なんて僕は始めて見ました」

にこにこ特に大した追求することなくそういったシュシュに、俺はそうだな、と、頷いて机の上に山と詰まれた本を見た。

―― …… 実際……俺が図書館の生徒ならもって作業は順調に進んでいただろう。

—— …… 読み解けば読み解くほど、術の難解さに溺れていった。

気がつけば俺は術を解放することを考えていた。

術の構成は大地の保有している力を吸い上げ具現化する。

そしてそのモノと契約を交わす。

召喚術に似ているが、契約を結ぶ精霊を自ら作り上げるところから始めるわけだから格が違う。

失敗すれば大地は荒廃するだろう。

世界が維持できるか分からない。

こんなもの誰が考えたのかということも恐ろしい限りで理屈では可能のところまで研究は進んでいたようだが、それを実行するだけの術師が存在しなかった。

そして自分の慢心に気がつかない俺は、ついにその禁書の術式を試してみることにした。

駄目で元々。

実行場所を選んだところは森の中心。

人が入り込むような場所ではないし森全体に強い結界を施したから失敗しても俺が一人居なくなるだけだ。禁術の前に俺一人の命なんて大したものじゃないと思った。

その日はやけに空が明るかった。夜だというのに闇を感じさせない。煌々と輝く月はまるで太陽のようだ。

俺は円形状に作った空き地に魔方陣を描いていった。各方位に対応した魔法石も設置して準備は万端。

方陣の中心に立ち呼吸と気を整える。足先で燻っている大地の力を感じる。身体と大地が一体化したような錯覚を起こす。抱かれる感覚が心地良い。足先を二度弾く。それを合図に魔方陣が浮き上がり魔法石が光を放つ。

ゆるりと記憶した詠唱を始める。永い永い呪いだ。

だがその全て順調。全てを掌握できると思った瞬間、足元が揺れた。同時に十六方位に配置した魔法石が砕け散る。

大地が暴走した。

溢れた力は魔法石を破壊し地の波になりその中央へと襲ってくる。

これは自ら描き足したものだ。

もし失敗しても力が外へと流れ出ないよう、中央へと集め自らの肉体を介して地表へと戻す。俺の器なら、そのくらいの尻拭いは出来るだろう。

俺は潔く死を覚悟した。

—— …… !

どん…… っと、大きな地鳴りがした。

それと同時に飛び込んできた現実を、俺は信じられなかった。

「ああ、貴方でも掌握できなかったみたいですね？」

俺が地面に膝を付くとどこから様子を見ていたのか、すっと現れた影があっさりと溢れ出た力を拡散させる。

月が明るすぎて姿を隠している星たちがはらはらと降ってきているようだ。

「面白いものが見られると思いましたのに、残念です。仕事を増やしただけのようだ」

黒尽くめの男は月を背に俺を見下ろしている。

陰になってその表情は窺えないがシルエットだけで分かる。

闇猫だ。

「哀れな仔猫。生半可な先詠みの素養を持ったが為に振り回され抗えなかった」

闇猫はくるりと杖を回して悠々とした調子でそつ口にする。

完全に蔑まれている。

それは分かったがそんなことどうでも良かった。

俺は地面に伏していた見慣れた姿を掻き抱き自分でも驚くほど掠れた声で名を呼んだ。

「……っ。シュシュ！」

既に生命を維持出来るだけの力は残っていないようだ。

足元から肉体の乖離が始まってしまっている。

降り注いでいる光に瞳を細めて綺麗ですね、と、場違いな感想ま

で呟き微笑む姿に俺は唇を噛み締めた。

「良かった、です。怪我ないで、すか？」

「何でこんな所にお前が居るんだ！ どうして、どうして！」

「僕、夢を見るんです。何度も、なんど、も。いつも、カナ伊さんを、助ける夢です。だからきつと、本当に、貴方の助けになると…なれ、ました、か？」

「俺なんか」

「カナ伊さんは居なくちゃ、駄目な人です。僕が、ずっと……ずっと…憧れ、てた。天才、術師……です」

体中が震えていた。

涙を堪えようとして唇を噛み締めると口の中に血の味が広がった。

死ぬのが怖いなんて思ったことはない。

でも、誰かに死なれるのは嫌だ。

俺は誰かを犠牲にして生きなくてはいけないほど価値がある人間じゃない。

—— ……俺は、天才、なんかじゃない。

「平気、です、よ。貴方には、これ、から……すくいとへんか……が、おと、ずれる、から」

シュシュは笑った。

何で、何でこんなときに笑うのか分からない。

俺は救いも変化もいらない。

いらなかったんだ！

現状で満足していないといけなかったんだっ！

俺みたいなのは満たされることを望んだら、いけなかった、んだ。
ありがともいわせては貰えなかった。

乖離を終えた肉体は小さな種しか残らなかった。

「それ、渡してください」

その声で我に返った。

俺の前に立っていた闇猫は顔色一つ変えずにそういつて手を伸ばす。伸ばされた指先を眼で追うと握り締めていたはずの種が手の中から抜け出して闇猫の手に治まった。

「さてと」

そのまま帰ろうとする闇猫に待てと凄むと、闇猫は首だけでこちらを見下ろした。

「何故シュシュを止めなかった！ 傍に居たんだろっ！ 見ていたんだろっ！」

誰かが俺の張った結界に穴でも開けないとシュシュはこの場に近づけなかった。あいつに俺の結界を破るだけの力はない。

「それを私に問うのですか？ 私には貴方を助ける義理も彼を助ける義理ありません。ただ、私は慢心した術師が起こした不義で世界が乱れるのは後々面倒だと思ったので止めただけです」

それではと向き直った闇猫をもう一度引き止めたが奴はもうそこ

には居なかった。

そのあと俺は禁書を持ち出した大罪人ということで捕まった。元々俺が持ち出したものではなかったが、今更な話だ。

俺は禁書を持ち出した上に使用したのだから死ぬまで牢につながれていてもおかしくはない。しかし俺はそんなことどうでも良かった。

薄暗く湿っぽい牢の中で唯ぼんやりと過ごした。
時間も分らない。

漏れ聞いた話では俺のことは内々に処理され表立った事件にはならなかったようだ。確かにあんなこと国としても漏らしたくはないだろう。

それから俺に太陽が昇ったのは思いのほか早かった。

「ごめん、遅くなったね？」

—— …… 城を出よう。

そんな言葉に顔を上げたのはきっとシュシュがいい残した『救いと変化』に俺自身絶った結果だろう。

「あれ？ カナイ珍しいね。館内以外にいるなんて？」

眩しすぎる空を見上げていると、ひょっこりと現れたマシロが遠慮無しに俺の顔を覗き込んでくる。

「お前こそ何してんだ？」

「私？ 私はシゼを日干ししようと思って引っ張ってきたんだけど？」

あんたも日干ししたほうが良いわよ、と、失礼なことをいって笑うマシロの後ろをちらと窺うともものすごく迷惑そうなシゼが居た。持たされているバスケットに入っているのは水筒と微妙な色合いのクッキー……一目でマシロが作ったのだろうと分かる。

俺は嘆息して腰を上げると、ぽんぽんとシゼの肩を叩いた。恨めしそうに睨みつけられたがマシロお手製物は勘弁して欲しい。妙なトラウマがある。

「あれ？ カナイ、戻るの？ 一緒に食べよう。今日のは自信作で」
「遠慮する。お前の自信作に味が伴っていたことは今まで一度もないだろう？ それに、俺は忙しいの！」

「たった今まで暇そうに日向ぼっこしてたくせに！」

「はいはい、今度な、今度」

激高しそうなマシロをほったらかしにして俺は屋上庭園から降りる階段へ続く扉を開いた。まだ後ろからぶーぶーいつてる。

シユシユの予言通り俺には救いと変化が訪れた。

それが世界に必要なことなのかなんて大それたことは分からない。でも少なくとも俺自身には必要なことだったのだろう。

「あ、カナイ。君だけ逃げようなんて無理だよ」

階段を途中まで降りるとエミルに捕まった。

がっしりと腕を取られて階上へと引っ張り上げられる。

「そうですよー。逃がしませんよ」

勘弁してくれと多少暴れたもののそれをあっさり無視して反対側をアルファに捕獲されてしまった。こいつに捕まったら逃げられない。

何かが変わるということは楽しいことばかりではないらしい……。

第五話：王子の憂い―前編―

この世に僕が生を受けたとき、種屋に母は願った。

『この子の素養を消してください』と、そして種屋はいった

『素養を消すことはならない。だが、暫くの間隠すことは出来る』

「セルシス様の弟君、素養が殆どなかったとか」

「まあ、セルシス様にあれ程の素養を見出されましたのに」

物心付いたとき僕は一人だった。

王の子どもでも素養が見出されないものも少なくないのに、生まれ出たその瞬間から期待されてしまっていた僕がその素養を持たなかったことで、僕は生れ落ちて直ぐ裏切り者になってしまった。

皆が噂するセルシスについて僕はあまりよく知らない。

十以上歳の離れた兄ということは知っていたものの、兄は早いうちにその素養を見出され王城に上がっていた。僕はといえば王宮内の離れにある豪華な屋敷に母と二人ひっそりと暮らしていた。

母はとても美しい人で、とても優しい人だった。

「ああ、セルシス。よく来てくださいました」

「母上、ご健勝そうで何よりです。エミルも大きくなったな？」

「はい兄様。お久しぶりです」

思ったままを口にすると母に睨まれるので、挨拶まで僕は屋敷

を離れる。

よく家庭教師のラウ先生が課外授業だといって、王宮の敷地内とはいえ屋敷や城からとても離れた場所まで連れ出してくれる。

僕はそれが楽しみだった。

「屋敷の前に豪華な馬車が止まってたけど、セルシス様がいらして
るの？」

「はい。なので今日は夕刻まで時間を潰したいんです」

殆ど愚痴のようにそういった僕に、ラウ先生は「良いですよ」と微笑んで屋敷から離れたポーチを陣取り分厚い本を開いた。

そしてその日は、丁度良かったと繋いで僕をそこへ待たせると彼は一度席を外した。一緒にと聞いたかったけど先生が向かったのは王城の方だ。

僕はあまりそっちに近寄りたくなかった。

待っている間本を読んでいても良かったのだけど、何となくそんな気にもなれなくてぼんやりと空を仰ぐ。

真っ青な空に薄い雲が掛かりその間を数羽の鳥が飛んでいった。

―― …… 鳥も死んだら種になるのかな？

なったら何の素養なんだろう？
やっぱり飛ぶことに特化しているのかな？

王の子どもなのに王の素養を持たない僕に意味なんてあるのかな？

必要のない僕はどうしてこうやって生かされているんだろう？

僕が死んだら種は幾らくらいで売買されるんだろう？
価値なんてあるのかな？

一人になつてぼんやりしているとき考えることは決まつてそんなことだった。自分の価値も見出せず必要とされることのない自分が大嫌いで……。

はぁ……と深い溜息を吐いたときラウ先生は戻ってきて苦笑した。

「またどうしようもないようなことを考えていたのかな？」

「え、と……すみません」

「私は別に構わないけど、女の子の前でそういう顔をするのは良くないな」

につこりといつも笑みでそういったラウ先生に目を向けて「女の子？」と首を傾げた僕を覗き込むようにラウ先生の背後から、左右にひよこひよこつと顔を出した女の子に僕は目を丸くした。

「はい、お二人ともご挨拶は？」

ラウ先生にその声を掛けられ一人は、にこりと勝気そうな笑みを見せ、もう一人は少しはにかんだような笑顔で前に出た。

「初めまして、お兄様。アセアです」

「ご、ご機嫌よう……お兄様……メネル、です」

きょとんとしていた僕の名前をラウ先生に呼ばれて我に返る。慌てて立ち上がり姿勢を正した僕は、すつと腰を折って名を告げた。

「この子達は正室のご息女だよ」

「え……？ ええ！ ラ、ラウ先生。そんな方たちを」
「七つになるんだ」

僕の驚きを遮ったラウ先生の言葉に僕は息を呑んだ。

つまり、今僕の目の前で微笑んでいる王女たちも素養がなかった……ないまでいなくても王位継承順位が著しく落ちる程に低かったのだろう。

僕の反応に「察しが良い子は話が早くて良いね」と微笑む。

「これまでも見ていたんだけど、これからは折角だから一緒にどうかなと思っただんですよ。エミル様なら王女たちの勉強も見て差し上げられると思いますし、何より私が楽出来る」

ラウ先生がどの辺りに本心を置いているのか僕は図りかねたが、そんなことよりもどう返答してもらえるのだろうと緊張して立っている二人の王女のほうが気に掛かって僕は頷いていた。

アセアは描き出すことに長けていた。

メネルは星詠みに長けていた。

二人の紡ぎだす星物語は興味深かった。

僕には、詠むことも・描くことも出来ないから、全てが目新しく何かを教えてあげなくてはいけないはずの自分が多くのことを二人から教わっているのに気がつくまでそう時間は掛からなかった。

僕らが顔を合わせるのはもちろん日の高いうちが殆どだから、二人は前の晩に見た星の話を大抵の場合は嬉々として語ってくれる。メネルが詠みアセアが描き出す物語は殆どが天気の話だったり花の開花宣言だったり可愛らしく微笑ましいものばかりだ。

「昨夜はお兄様の星を詠みましたよ」

「僕、の……星？」

曖昧な返答に「もしかして怖いのか？ 兄様」とアセアがからかい背を叩いた。怖いかどうかは良く分からないけれど、正直吃驚した。自分に価値なんてないと思っていたから自分に宿星があるなんて考えても見なかった。

「お兄様の星はまだ暗くてあまり見えませんでしたの。ですから、詠み解くことが困難で」

うん、そんなところだと思っよ。王宮内での僕の存在は希薄だからね。

申し訳なさそうに言葉を繋ぐメネルの頭を撫でるとメネルはゆるく微笑みその隣でアセアが周りに気を配りながら早くともネルを急かした。

「私たち双子星は暫らく也を潜めます。その代わりにお兄様方の周りが騒がしくなる」

慎重に言葉を繋ぐメネルに少しの不安を感じながら僕は黙って耳を傾けた。

「四つの共星に一つの兆し星。兆し星はお兄様の道を照らします。

お兄様は進むしかない……でも、その中に凶星があつて……それに絡んでいる強い星が……」

「メネル」

ごくりと僕が息を呑むとアセアがメネルの腕を引いた。

メネルが、はっと我に返ると前のめりになつていた姿勢を正した。

それと同時に姿を現したのはラウ先生だ。困つたように微笑んで顔を覗かせてきた先生に二人は顔を見合わせて頷いた。

「―― ……今日はお二人とも早いですね？ お迎えに上がったら無駄足を踏んでしまいました」

「今日は時間があるから先に行くつてお伝えしたと思いますけど」

「ラウは、時々抜けてるから忘れてたんじゃないのー？」

「なるほど、そうですね。そうかも知れません。それで、お三方で内緒話ですか？」

笑顔だがラウ先生は少し癪に障つたのだろう。

空気がほんの少し重くなった。

特に隠すような内容があるとは思えなかったから、説明してあげようと思つた僕の台詞を遮るようにアセアが口を開く。

「やきもち！ ラウがやきもち妬いてるーっ！」

「ラウ先生可愛いです」

ね？ と話を振られても返答に困る。

でも、二人が僕の星の話を他言したくないというのは良く分かったから僕も頷いておいた。

ラウ先生は特に動揺する様子もなく肩を竦めると「そういうことにしておきましょう」と納得しいつも通りの個人授業に移ってくれた。

それから二人が僕の星の話をするとはなくなった。
いつも通りの緩い時間がのんびりと流れる。

僕は僕自身の価値を未だに見出すことは出来ず、身体の中で何か
が燦っているのだけが居心地悪く感じていた。

王宮の夜はとても静かだ。

離れの屋敷である自宅は特に静かで、窓を開け空を仰げば星は降
ってきそうなほど煌いている。

その日はとても大きく月が輝いていた。とても近く感じた。手を
伸ばしてもとても届きはしないけど……。

「お兄様！」

「う、うわぁっ！ メネルっ！ どうしてこんなところに、こんな
ところまで来ちゃ駄目だよっ」

ぼーっと開け放った窓から空を仰いでいた僕に掛かった声に驚い
て身を乗り出し辺りを確認する。アセアならまだしもメンルが一人
でこんなところまで出てくるなんて信じがたい。

「一人です。皆、アセアに気を取られていて私だけ抜け出して来た
んです」

「抜け出してって、どうして？ どうしてそんなことをする必要が

あつたの？」

「今夜は星が動きます。私たちの星が動く」

明かりの所為かメネルの顔色が優れないような気がした。

僕はメネルの言葉の半分も理解出来なかったけれどこのままここにいさせるわけにもいかないし、何が起っているにせよメネルは王城に届けなくてはならない。

彼女は正室の息女だ。

玄関から出れば使用人に止められるだろう。

僕は行儀悪く窓を乗り越えて庭に出た。

取り合えず送るからとメネルの手を取るとメネルはぎゅっと手を握り返しゆつくりと歩き始めた僕に合わせて足を踏み出す。

「星が動くってどういうこと？」

「……第二タリ様ご子息の星が消えます。闇猫が来ます。種はその場で直ぐに売買される」

「誰に、売られる予定？」

メネルの言葉はこれまで違えたことはない。疑う余地はなかった。僕の問い返した言葉にメネルは普段刻むことのない眉間に縦の皺を寄せて、短く深呼吸すると改めて開口する。

「お母様です。お母様は私とアセアに素養がないことを嘆いておられた。私やアセアではお母様のお役には立てない。だからお母様は第二タリ様のご子息が病弱なのを知って……全ては私たちが素養を持たなかったことがいけないんです……私たちが」

「いけなくなてない。駄目じゃない。アセアもメネルもこの国に必要な子だ」

自分の存在に嘆くメネルに必要以上に強い声で答えてしまった。
メネルに自分の姿を重ねた。

自分が必要とされない価値がない……そう思っていることが重なってしまった。

「少なくとも、僕には必要な子だよ。二人とも……。可愛い異母妹だよ」

歩みを緩めて空いたほうの手でメネルの頭を撫でる。

メネルは最初急いでいたんだけど今はもうその様子はない。

つまり……もう、間に合わない。そう、いうことなんだろう。

第六話：王子の憂い―後編―

「お兄様、以前私がお兄様の星の話をしたのを覚えていますか？私は伝えるのが役目でその為に生を受けた。私は王室に生まれたけれど王になる為に生まれたわけじゃないんです。だから私はお兄様に伝えます……」

ことん……メネルの言葉に僕は心の何かが埋まったような気がした。

王室に生まれたけれど王になる為に生まれたわけじゃない。
王になることだけが王室の子の役割ではない……。

まだ幼い妹のほうが余ほど自分を知っている。
僕は一人でうじうじとずっとずっと悩んでそんな簡単な答えすら導き出すことが叶わなかった。

「お兄様？」

つい考え事に耽ってしまった僕に心配そうな声が掛かり、僕は短く詫びて続きを促した。メネルはにっこりといつも笑みを取り戻して頷いた。

「お兄様は従えるものです」

「僕が、何を、従えるって？」

王になることだけが役割じゃないと得心したとき、僕は何をする為にここにいいのかと自問しているところへのメネルの言葉に僕は戸惑いを隠しきれなかった。メネルはそんな僕の心を見透かすよう

な透明な微笑で僕を見て続きを口にしようとしたら、耳慣れない声に遮られた。

「王城を抜け出して夜の散歩とは大胆ですね」

王子、王女……と、続けられ咄嗟にメネルを後ろに隠すと慌てて声の主を探す。

「そう慌てなくても私は王宮関係者ではありませんからね。どうぞお気になさらないで下さい」

いつからそこに居たのか目の前で静かに微笑んで佇んでいた獣族の男にメネルが身体を固くする。そして小声で「闇猫……」と囁いたのが聞こえた。

闇猫。

今の種屋の主人がそう呼ばれていることは僕も知っている。しかし、僕が想像していた闇猫とは随分印象の違う感じだ。

「今夜みたいな夜は外にも出たくなるでしょう？ 特に王女のような方は……この星が降るような夜空は星々のザワメキが耳汚しになる」

闇猫の軽口にメネルは僕の後ろから出てきて抗議する。

「そ、そんなことはありません！ 星々は私たちに囁きかけてくれるんです。過去のことであつたり未来のことであつたり……わ、私は、アセアとそれを描き出すのが好きだった」

必死に訴えるメネルの言葉も闇猫には届かないようだ。

飄々として捕らえどころのない態度に感情の籠っていない言葉が紡ぎだされる。

「そう、それは良いご趣味ですね。しかしそれが今後も出来るかどうか。私は数日前どちらに与えるべきか問われました。私は迷わずアセアと答えた。そんな私を王女は、恨まれるのではないですか？」

抑揚のない声で紡がれる言葉にメネルはきゅっと唇を引き結んだ。小さな手が僕の手を痛いくらい強く掴んでいる。しかし、その力が、ふっと緩むとメネルは首を振った。

「恨みません。貴方はお兄様に係わる方。私はお兄様の礎となる。それが星のさざめき……」

驚きに口が挟めなかった。どうして良いのかまるで分からなかった。

「貴方はそこまで星が詠めるのでしたらやはり大聖堂で学んだほうが良いのではないですか？ 妨げになる妹君ももう共に過ごすことは叶わない」

「い、いい加減にしろっ！」

分からないまま僕は叫んでいた。

闇猫は楽しげに微笑んでメネルから僕に視線を移した。

「二人が妨げあっていたなんて事実はない。二人は」

「馴れ合っていた。王家に生まれながらその素養は他のものだった。姉メネルの星を詠む素養は国で指折りになるでしょう。私が保証し

ます。しかし、妹アセアの素養は類稀とまではいかない。王家の血を引きながら唯凡人でしかない。王の素養も持たない、非凡な素養もない……戯れあっていたに過ぎない」

「そんなこと……ない……」

僕には素養は見えない。

見る目を持つては居ない。

「ああ、貴方も唯一の素養を除いては驚くほどの素養はないようですね？ ふふ、劣等感でもお持ちなのですか？」

飄々とした態度のままゆるゆると言葉を紡ぐ闇猫に僕は息を呑む。

「闇猫……戯れは貴方のほうです。貴方だって詠むことの出来る方……お兄様を傷付けないで下さい。貴方はもう既に関係者です。種屋を受け継いだその時から」

いつもどこか怯えているようなメネルからは想像できないくらい落ち着いた声だった。そんなメネルの言葉に闇猫は面白くないかと呟いて盛大な溜息を零す。

「貴方一人今ここで消したところで世界は痛くもかゆくもないでしょうけれど、貴方がそのまま星詠みを学ぶならば、見逃しましょう。行く行く詠む為だけに王城まで呼び出されることもなくなりそうです。私が楽出来そうですから」

人が来そうですね、と、締めくくると闇猫はすたすたと何の戸惑いもなく歩み寄って来て僕の顔を無遠慮に覗き込む。

「私は星詠みはしない主義なんです。先が分るなんてつまらないでしょう？ まあ、運命なんて流動的なもの、変わらないわけではありませんが……それでも、逃れられないものはあるんですよ」

私が今種屋であるように……ね。と、締めくくって闇猫はぴんつと僕の鼻先を弾いた。屈辱的な気分には堕ちたが闇猫は直ぐに城のほうから来たのだろう衛兵に呼ばれて面倒臭そうに返事をした。

「兎に角、姉君は城を出るべきです。そうでないと私が妹君を選んだ意味がない」

闇猫の暴言を謝罪させようとしたらメネルが僕の腕を引き、顔を上げないまま「早く行ってください」と零した。

闇猫は大きく浮かぶ月明かりを浴びて酷薄な笑みを浮かべるとそれ以上は何もいわずに立ち去った。

あれからメネルはアセアが王城にて、別な教育を受けることになると、闇猫の言葉通り王城を出た。

残された僕はメネルの言葉を繰り返し思い出し、それでも何か踏み切ることが出来ず、燻っていた。

僕がある種のケリをつけたのは……兄、セルシスの訃報を受けたときだった。

素養に踊らされるこの世界はオカシイ。
種を巡り、種屋を中心に抱き争うのもオカシイ……何かが間違っている。

「……ブラックは、あのとき……」

「あのときとはどのときですか？ 貴方がうじうじと王宮の隅っこでいじけていた頃の話でしょうか？」

魔法石の加工を忙しく行っているときにふらりと現れた闇猫の言葉に気分を害するのは間違っていると思う。

思っけれど……嫌な奴だ。

「星は詠まないといったでしょう？ 私は先のことは興味ありません」

「うん。そうだね。そうじゃないとこんな事態に発展しないよね。一時でも我慢出来ないのなら帰さなければ良かったんだ。馬鹿だね。ほんつとーに無駄なことをさせるのが好きだね」

「……可愛くなく育ちましたよね……王子は」
「お陰様で」

メネルとアセアの言葉通り、僕は共星を得る。

凶星はきつとセルシスのことだと思う。

彼が居なくなったことで国は大きな損害を受けた。

王や直属の臣下たちの落胆振りも凄く、誰かが死ぬなんてよくあることなのに王宮全体が喪に服した。

まるで王が崩御したときのようだった。

ただ、僕が気になるのはもう一つ……強い星の存在。

最初は闇猫のことかと思っていた。でも、今の彼を見ていると災いの元凶とは思えない。少なくとも僕に兆しを与える、道を照らし出してくれる星が残念ながら愛した相手だ。

……だと、したら……残り一つの星は……一体誰を指すのだろうか？

「本日も変わりなくお忙しそうですね」

最近種屋は暇なんですか？ と、付け足しながら僕の傍に寄ったのはラウ博士だ。ラウ博士は一通の手紙を僕の前に置いた。

「また、アセア様が倒れられたそうですね」

ぼそりと零された言葉に僕は頷くと手紙の封を開きながら「今日明日にでも様子を見に行きます」と答えた。その返答に、ラウ博士は頷くとそのときにはお供しましょう、と、いい残してその場を去った。

ラウ博士の姿が見えなくなるまで見送ると手紙を開く。

城内を描いた絵が一枚と見慣れた筆跡の手紙が一枚。アセアからだ。一緒に居た頃は気にしたことはなかったし気にするようなこともなかったのだけれどアセアは身体が弱かった。

人一倍元気で走り回っていた頃の記憶しかないから最初は信じられなかったけれど、メネルが懸念していたことはこれだろうと納得すると、多くが理解できた気がした。

内容を確認してから手紙を元に戻し溜息を零すとブラックが口を開く。

「エミル。私は星は詠みません。詠みませんけどね、そんなもの詠まなくても分かることも多くあるんですよ」

「例えば？」

「うーん、そうですね。まあ、信用に足るかどうか見極めよ。と忠

告します、ね」

「……それは君のこと？」

「……本当、可愛くなく育ちましたよね」

ま、私のことは信用していただく必要ありませんけどね。と、締めくくり気分を害したのかブラックは近くでカナイの作業を手伝っていたアルファにちよっかいを出し抜刀させると楽しげに外に連れて出てしまった。

マシロならきつと誰かを疑うなんてこと好まないだろう。

でも、僕はブラックの言葉どおり見極める目を養う必要がある。母が憂い妹たちが憂い国が憂い世界が何に憂いているのか……そして、何を望んでいるのか……。

「その為にはまず兆し星に戻ってきてもらわないとねー」

細かな作業に疲れ、僕は、んーっと身体を伸ばした。

今日も外は上天気で空の高いところを自由な鳥たちが飛び去っていく。

でももう、今の僕はそれを見て気分が沈むことはなくなった。

第七話：種屋の静観―前編―

未だに少し信じられない。

―― …… 自分が唯一人に執着し手に入れることを望むなんて…。

学生を続けたいというマシロの願いを聞き、週末だけ戻ってくる彼女が心地良さそうに眠るのを眺めているだけでほんのり暖かい気持ちになる。自分にこんな感情があることにも驚く。

自分が感情など不要だと痛感したのは前店主の種を飲み下したその瞬間からだ。

「つく、あつ…… ああつ！」

両膝を真つ赤に染まった絨毯の上に落とし片手を付き突つ伏すのだけは堪える。

空いた手で体内を駆け巡る力の暴走を抑えるのと脳に直接叩き込まれる何代と続く店主たちの黒い記憶。

種を飲むのに苦痛が伴う、とは聞いていなかった。

目を覆うような惨劇が目前に迫る記憶も一度や二度ではなくて、いつそ気を失ってしまえば楽なのにと頭の片隅でちらりとよぎる。

その願いと共に、暫く意識を失くしていたようだ。

窓の外に見える月の位置は変わらない。今も夜だ。

しかし、頬に当たる血の感触は既に乾いていたし浴びた返り血も動けばはらはらと乾いて落ちた。

先代は屋敷に人を置いていた。
美しい娘ばかり何人も……。

疼くこめかみをぐつと押さえて部屋から出ると、偶然かそれとも中の様子を窺っていたのか使用人と出くわした。

「て、店主様は……」

震える声で訪ねてきた使用人の言葉は、主を心配したものではないだろう。ただ、己のこれからの安否が気になっている。そんなところだ。

「今は何日ですか」

「二十七日です」

二日も寝ていたのか。

どうりで身体の節々も軋む。

返り血もそのままの私を怯えたように見詰めている使用人に口角を引き上げると告げた。

「種屋は代替わりをしました。私が次代の店主。私に貴方たちは必要ない、解放します」

私の言葉に使用人は胸の前で合わせ組んでいた両手にきゅつと力を込めて安堵したようだった。

その様子を感じ深く思うこともなく、コツツと足を進め、擦れ違う瞬間先代を貫いた刃で使用人の命を絶った。

「解放、されましたよね？」

どさりと重たい肉体が床にひれ伏す音もない。

―― …… もう返り血など浴びる必要もなかった。

種屋になるということはこういうことだ。

血など見ることなく命を搾取できる。

手の中に残った小さな種を握り潰しその場に捨てた。

命なんてくだらない。

生など固執する価値もない。

屋敷に居たものは逃げ出す暇も与えずに一掃し、屋敷には火を放った。

先代が使っていたものなど何一つ必要ない。大体こんな街中に権力を誇示する為といわんばかりの豪邸、愚かしい。

次代の種屋の残忍さは直ぐに世間に広まったようで、その類の依頼ばかり暫くは引っ切り無しに届いた。

面倒ごとを減らそうと、銃器を扱うようになった。国ではあまり使われないが飛び道具はそこそこの利用価値がある。

今日もその手入ををばんやりと行いながら、自分と対立する貴族の命を奪って欲しいという内容で私腹を肥やし自らも肥え太った男が依頼に来ていた。金なら幾らでも出すそうだ。

「店主殿、如何でしょうか？」

「構いせんよ。構いせんが、その程度の怨恨で他者を消して良いのですか？」

かちやりとりボルバーを納めて、そう問い掛けると依頼主は厭らしい笑みを浮かべた。

「闇猫とも呼ばれる貴方がそんなことをおっしゃるとは思いませんでしたな？」

「……私を何と呼ぼうと構いませんが、私は貴方の依頼を受けます。私は消す依頼は受けますが護る依頼は受けませんよ？」

今回の依頼主も愚者なようだ。私のいつている意味が分からないという感じた。兎に角早く殺してくれといい残して屋敷をあとにした。

私は依頼通り相手を消した。

そして直ぐに次の依頼は舞い込んできた。

「父の敵を討って欲しい」と……あまりにも予想通りの展開に笑いが零れた。断る理由もないからもちろん承諾する。

先日顔を合わせたばかりの男は、満悦そうに椅子に揺られていたが私の姿を見て目を見開いた。

「な！ 金なら払っただろ！ 何故闇猫がこの屋敷に居る！」

「……私はいったと思いますよ？ 消す依頼は受ける」と

静かに銃口を向けられて、男はなりふり構わず命乞いをした。見苦しい。考える時間など与えるんじゃないかった。短い溜息と共に引

き金を引いた。

そんなくだらない時間がとても長く続いていた。

「また、貴方ですか？」

「また。とは随分だなあ。私は得意客でしょう？　上客だと思っけど」

全ての勢力圏から離れるように屋敷を構えたのに、彼らの訪問は絶えなかった。

この日も特に供をつけるでもなく単身現れた男は、王宮関係者に他ならないが本人もいつているように得意客というか、常連だ。

「それで、次は何を求めるんです？」

「薬師。薬師の種をくれませんか？」

「……薬師……それで専門は？」

「私が細かなものを欲しがるわけない。図書館にも伝を作って置いたほうが良いと思ってさ」

ああ、そうだ。お茶が飲みたいな。などと、軽口までここで叩くのはこの男ぐらいだ。

「行く行く預かることになる王子が、第二素養に薬師を持ってるんですよ」

「……預かることになる、王子……」

その言葉に、ふと先代の記憶が過ぎった。

いつも一人分の用意しかない茶器を追加して男の望みどおり茶

を用意してやる。

「第五タリー様の末子ですか」

「あれ？ 知ってるんだ。君の代じゃなかったと思うんだけど」

少し驚いたようだったが男は軽く肩を竦めて「まあ。種屋さんは何でもありということか」と纏めて勝手に納得したようだ。

「いっておきますが、先日 of 術師の種の時と同額、もしくはそれ以上しますよ」

「出世払いはさせて貰えないんだよねえ。仕方ない、構いませんよ。幾らでも……私の金遣いの荒さは王宮でも有名だから今更です」
「どうせ、何に使ってるかまで分かるようにはされていないのしょう？」

「ええ、まあ。言い掛かりをつけられて貴方に抹殺依頼とかされると厄介だから」

今日の天気の話でもするようにあつさり口にしたが男はそのことを一番警戒しているのだろう。確かに、誰かがそんな依頼を持ち込めば特に断るだけの理由もない。私は受けるに違いない。

「私でも貴方の欲深さには感服します。貴方はどれだけのものを欲しがるのでしょうか？」

いいつつ呆れたものの、私は強欲な目の前の男のことを疎ましく思うことはなくどちらかといえば好ましいとすら感じていた。

自分の欲望に正直でありながら、賢い。

薬棚から男の欲しがる種を取り出し、いつものように渡してやる。男はそのあと今 of 王宮や大聖堂・図書館の話をひとしきり勝手

に話して、屋敷をあとにした。

屋敷を後にする後姿を見送りつつ、短く息を吐く。あの男ほど見た目と中身が違ふ人間は珍しい。

第八話：種屋の静観―後編―

稀にあるあの男の訪問は愉快ではあったが、毎日が退屈なのに変わりはなく時は唯流れていくだけに過ぎなかった。

種の回収ついでに王都の様子も見た。

第五タীরの末子は思っていたよりもずっと弱弱しく不安定な存在だった。

稀代の天才術師と名高い少年はその力と才を持て余し、天才と呼ばれる剣士はその剣をいつ折られてもおかしくない状態だった。

そしてそれらを取り巻くものたちはいつも通り王宮も、大聖堂も馬鹿馬鹿しい小競り合いを繰り返していた。

図書館だけは性質上日和見をしている風だったがいつでも内包した火種は何に燃え移るか分からない。

「少し星が足りませんねえ……」

夜空を仰ぐとひととき大きく輝く力強い星に目を細める。

星詠みはあまり好きではなかった。

だから読み解こうとは思わない。

これ以上毎日を退屈なものにするのはたまらない。

「今日は依頼に来たんです」

「は？」

驚いた。

強欲だとは思っていたが愚かだとは思っていなかった。

「まあ、依頼というかちょっと試してみたくて」

「何です。次は王にでもなるつもりですか？」

「はい。ちよつと王家の素養に興味があります」

言葉を失った。

愚かしい。

別の相手ならそういつて捨てただろうが目の前の男は本気だ。

これまでも王家の血を引かないものがその種に手を出すことはあったが……。種が根付くことはなかった。

そのことを話したからといって目の前の男は納得しないだろう。

「無駄、だといっても納得はしないのですね。まあ、良いでしょう。お得意様ですしね」

ほんの気まぐれだった。

「それで？ 王でも消そうというのですか？」

「まさか！ それではうちの父君の据わりが悪くなる。彼にはまだまだ働いていてもらわないと困るからね。王子が良いな。それも立ち居地が微妙な王子が良い……」

楽しげに語る男の口調は余りにも軽く、命を軽んじてきた自分自身を見ているような気がした。

そして、その気まぐれで様々な局面が動き始めた。

沈着状態だったものが動を成した。

「……………」

どくんつと内包された種が疼いた気がした。

ぎゅつと胸を押さえると、その気配に気が付いたのか、傍で丸くなっていたマシロがうつすらと瞼を持ち上げる。

「大丈夫？」

「起こしてすみません。大丈夫です」

いつて額に口付けるとくすぐったそうに肩を竦めた。

「それなら良いけど、眠れないの？」

「平気です。眠りましょう」

起き上がりそうだったマシロをもう一度ベッドに戻して横になる。

マシロは直ぐに再び夢に落ち私は眠れない夜を過ごす。

種は肉体の内側から四肢の先まで根を張り同化している。

過去の種屋の歴史はもう己の一部だ。

今更、それが疼くはずもないし、自分のこれまでがそれほど後ろめたいとは思わない。

寧ろ今までの店主に比べれば、無関心を貫いただけ平和的といつても過言ではないと自負できる。しかし、それでもマシロが知れば傷つくだろっし、私の為に憂いでくれるだろう。

そして、友達とやらの為に自ら面倒ごとに足を踏み入れる。

白い月青い月二つ月……月が揃ってしまつたら望む望まないに限

らず、赤く染まってしまうのだろうかと思うと、正直、止まることのない時間を恐ろしく感じてしまう。

「ねえ、ブラック」

もぞりと動いて顔を上げたマシロと目を合わせる。

目が覚めてしまったのか先ほどまでの夢つつつという感じではなさそうだ。

「私、一度聞きたいと思っていただけ」

忘れてたと続けた彼女に曖昧な笑みが零れる。忘れる程度の質問なら別の機会にすれば良いのにといても聞かないのだろうか。

「何ですか？」

「ブラックって木の上で昼寝するのが趣味なの？ でもあれ以来そんな姿見ないけど？」

「……何を突然……」

マシロがいつているのは多分一番最初に出会ったときのことだと思う。

「ブラックがあそこで寝てたのは偶然？」

「まさか、必然ですよ。変化の兆しがあの辺りだったので、暇を見つけては張ってました」

確かにあの夢見草の木は大きくて登ると見渡しも良い。

だから嫌いではないのも事実だけれど……気まぐれで見上げた空に兆しを見付けてしまったから気になって仕方がなかった。

胸騒ぎがした。

「まあ、人が落ちてくるとは思いませんでしたけど」

「……私も落ちるなんて思わなかったわ」

それにそれが一生を左右する出来事になるとは思わなかった。と、しみじみ口にしたマシロの頬を撫でる。

「マシロは……」

いい掛けて口を嚙むと変わりにマシロが口を開く。

「私は人に恵まれているんでしょう？ ブラックって、何でも出来るし基本的に強気なくせになんていうか時々脆い感じがするよね。そんな顔しなくても、私は後悔してないし、幸せだと思ってるよ？ それなのに、不安や不満を感じて後悔していると思うならそれは私に失礼だよ」

眉間に皺を刻んで不機嫌そうに口にしたあと、ぴんつと額を弾かれて苦笑する。きつとそのまま謝罪したら刻まれた皺は深くなるだろ。そんな言葉が欲しいわけじゃないと怒るに違いない。

「ねえマシロ。折角起きたんですから」

いつて口付けると意味を解したのか、直ぐに顔を真っ赤にさせて逡巡してしまう。

時折真理に近い言葉を紡ぎだし翻弄するくせに、ちょっとしたことで羞恥を露わにする。少女のような愛らしさを含んでいて飽きることはない。

複雑に絡み合った歯車は一度動き始めたら止まることはない。

時折じくじくと古傷を抉るように痛む胸は何代もの種屋が得なかったものを初めて刻んでいる痛みだと思うことにした。

第八話：種屋の静観―後編―（後書き）

お付き合いありがとうございました。

連続投稿は一応ここが区切りです。もし続きを手がけるとしたら銀狼譚投稿後となると思います。

次回予定は、作られた天才と、一般人という感じです。その次は蒼月教徒とマリル教会について書きたいなと思っています。その際にはお付き合いいただけると嬉しいです。

感想など寄せていただけるとかなり喜びますのでお時間ありましたら相手してやってくださいませ^^

(1)

「ふえつくしゅん！」

「典型的なくしゃみですね？」

アルファに押搦されて、ずずつと、鼻を嚙ったのはカナイだ。そのカナイのくしゃみに応じたように、部屋の中が軋んだ気がする。

本人曰く高熱のせいで、魔力が多少なり漏れでてしまっているらしい。

「熱まだ高いね。何か、欲しいものとかある？」

「ない。強いていうなら静寂が欲しい。こいつどっかやってくれ」

ぴとりと額に手を置いて、そういつた私の手を、ぺっぺつと払って眉を寄せ、カナイは気だるそうにそういつて、アルファを指差した。

ちらりとアルファを見ると「ここは僕の部屋でもあるんです」と、不貞腐れていた。

アルファのいうことも尤もだけれど、カナイは今病人だ。風邪ではあると思うし、ここは図書館だ。

治療に困るようなことはない。それを差し引いて困るといえば、この環境だ。

「アルファ、外出ようか？ 私、何か買いに行くよ、一緒に行かな

い？」

「何かってなんですか？」

「カナイ、何か食べたいものとか」

「ない」

即答。

カナイは掛け布をぐいっと頭の先まで引っ張りあげて、背を向けてしまった。

「別に、マシロちゃんのせいじゃないですよ。カナイさんが変なところでデリケートなだけで……」

アルファはしょぼんとしてしまった私の背中を、ぽんぽんと叩きつつ慰めてくれる。私は曖昧に微笑んでありがとうと答えた。

「さ、デートでしょう？ 行きましようー！ もう直ぐエミルさんが薬持ってきてくれると思うし、カナイさんは放置決定」

ぐいぐいとアルファの腕を引かれて、二人の部屋を後にした。

カナイの風邪の原因は、私だった。ギルド依頼でちよつとしたミスがあつて……まあ、簡単にいえば、今の季節は冬。依頼地は極寒だった……そこで、さ、ほら、氷が張った湖に落としちゃったんだ。て、てへ？

私にすれば、風邪で済んでいるほうが不思議だ。

よく即死しなかったな……とちよつと思う。いや、不幸中の幸い。そんなわけで、カナイは極悪状態で寝込んでいる。

「——……りんご、とかなら、剥くだけだから食べるよね。きつと……オレンジとかもいけるかな？」

「マシロちゃん、分かるんだけど、量が多くない？」

「失敗しても大丈夫！」

「いや、剥くだけって……良いですけどね？ 別に。これ余ったら食堂でアップルパイ作ってもらって良いですか？」

大きな紙袋二つにりんごとオレンジを山ほど買って、寮に戻ったらエミルが薬湯を飲ませたあとだったようで、片付けをしていた。

「王子にやらせることじゃないですよええ。看病とか」

どさどさつと中央のテーブルに紙袋を載せて、相変わらずチクチク攻撃をする。

「僕は別に構わないよ。マシロが寝込んだわけじゃないから、良かった。それにアルファ、カナイ、眠りが余りにも浅いから薬で眠らせてるんだ。何いっても起きないよ？」

くすくす愉快そうに笑ってそういったエミルに、アルファはカナイの顔を覗き込んで鼻を摘む。ぐつと苦しそうに唸っても、それ以上動かないのを確認して「ホントですねえ」と解放し、残念。と肩を竦めた。

「カナイさんが寝てるんじゃない、つまらないんで、ちょっと早いけどロードワークいってきます」

「僕も、次の準備をしてくるよ」

マシロはどうする？ と続けられて「どうせ起きないから、部屋に戻っていても良いよ？」と重ねられ、私は机上のりんごとカナイを交互に見たあと

「皮むきの練習してる」

と曖昧に笑った。エミルは、少し驚いたような顔をしたけどマシ口が良いならと、残してくれた。

「――……というか、確実に、それ全部剥くつもり？　っていうので驚いてたんだよね、あれ……」

二人が出て行ったあとぽつりと零す。いくら私でも、食べる分くらいしか剥かない。よ？

カナイの額のタオルを取り替えて、そつと頭を撫でる。苦しそうな眉間の皺に申し訳ない気持ち再び戻ってきて、溜息を零した。ミニキッチンから勝手に果物ナイフと、お皿を持ってきてよいしよと腰を降ろす。しよりしよりしよりと、軽快に剥いていく。

私だってそんな筋金入りの不器用さんではない、漫画みたいになりんごの芯だけにしたりはしない。

「……若干、分厚いだけだよね」

時折カナイの口の端から漏れる、熱い息遣いを苦しく感じる。本当に申し訳なかったと思う。

そういえば、エミル……カナイの眠りが浅いつていつてたな。熱が高すぎて眠れないのかな？　それとも、普段から、なのかな？　みんなにはいつも気に掛けてもらっているのに私はみんなのことをやっぱり知らなさ過ぎると思う。

でも、私がどこまで踏み込んで良いのかやっぱり分からない。
男の子の世界って難しいな。異世界なら尚のことかな。

郁斗も、そうだったもんね。

最近なんて『真白には関係ないだろ』の一点張り。おねーちゃん
って呼べっていうのよねっ！ 全く。

(2)

「カナイ……」

適当なところで、皮むきを切り上げて手を拭くと、そつとカナイの傍に寄る。首筋に触れれば燃えるように熱い。薬、利いてきても良いのに……。

カナイが馬鹿になつたらどうしよう。

いや、多少何か抜けたほうがカナイのためかも知れない。カナイは詰め込みすぎだ。変なところで完璧主義だし、そのせいでとても肩肘張つてゐる気がする。

「良い子、良い子」

なんとなくベッドの端つこに腰掛けて、そつとカナイの髪を梳く。熱のせいがかいた汗で前髪がくっついて邪魔臭そうだった。薬で眠っているから、このくらいで起きたりはしない。寝ているカナイは少しだけ幼い表情に見える。

こつこつという感覚って母性なのかな？

ふと、自分の脳裏に浮かんだ考えが少しずれているような感じがして、自嘲気味な笑いが零れる。

「——……」

「何かあった？」

カナイの髪に触れたまま、ぼやんと考え事をしていたら急に息を詰めたのが分かった。

「…………め…………駄目だっ！」

急な声の大きさに私は慌ててカナイから手を離れた。でも、カナイは目を覚ましたわけではなくて、うなされているようだ。

「カナイ？」

「駄目だ、お前じゃ、無理。無理だから、頼む、やめて…………どう、して…………どうして…………」

「カナイ！」

かなりはつきりと声を掛けたのに、薬のせいで目が覚めないようだ。

「——…お、れが…………俺の、せい」

「カナイっ——！」

カナイの苦悶の表情だけでも、苦しくなりそうだったのに、目尻からつうと涙が零れるともう我慢出来なくて、私は激しくカナイを揺すった。

「カナイっ！ カナイつてばっ！！ 起きてっ——！！」

「…………っ痛…………痛い、馬鹿、脳みそ出る」

揺するな…………掠れた声で、そう聞こえて私は、はっ！ と我に返る。カナイの肩口を掴んで物凄い揺すったようだ。私が慌てて手を離せば、カナイは、はぁと熱い息を吐きながら体を起こし、すっかり着崩れてしまった寝着を直した。

「い、ごめん」

「いや、いい……それで、どうして、俺は叩き起こされたんだ？」
「え、あ……ええと」

まさか泣いてたとはいえないよね。夢とはいえ、相当怖いものを見てたみたいだし。そう思って私は慌てて、きよろきよしたら目に留まった。

「りんごっ！」

「は？」

「りんごが剥けたの！ カナイに食べてもらおうと思って」

私は、いつそいで立ち上がり、テーブルに載せたままになったりんごを皿ごと持ってきて、カナイにひと欠け突き出した。

「いや、今いらねーし……というか、それ、ナイフ。ナイフだから。せめてフォークくらい使ってくれ」

「え、あ！ ああ、ごめん！」

私相当天パってたようだ。果物ナイフで、差し出してしまっていた。急いでお皿を枕元に置いて、私はフォークを探しに立った。確かテーブルに用意しておいたはず。

良かった、あった。

「―― ……俺、うなされてた？」

片方の膝を立ててその上に乗せた腕を枕にして、そう呟いたカナイに私は一瞬動きを止めた。

そして、あーとかうーとかこぼしたあと、上手い嘘も浮かばなくて「うん」と頷くとカナイは苦笑した。

「まったく……だから、寝るの嫌なんだよ」

は「っ」と深い溜息を吐いたカナイに、ついでに持ち寄ったタオルを、酷い汗だといって押し付ける。

涙のあとくらいは消えたと思う。

「お前病人に対して乱暴だろ」

「そんなことないよ。甲斐甲斐しく世話してるじゃん」

「してねーよ。それにこの不細工なりんご……俺でももう少しまとものに……」

いい掛けて、まあ、大差ないかとそこは諦めたようだ。

「着替えて寝なおしたほうが良いよ。熱、まだ下がってないし……あ、そうだエミルに薬貰ってくるよ」

「——……ん、ああ、そうだな」

じゃあ、と踵を返した私をカナイが「なあ」と呼び止める。私が振り返ればカナイはこちらを見ることなくぼそぼそと口にする。

「聞かねーの？」

「何」

「いや、だから……どんな夢見てたのか、とか……何かあったのか……とか」

「ごによごによと口にしたカナイに、私はなんだか微笑ましくなる。

「話したほうが、カナイが楽になるなら聞くけど。そうじゃないなら、別に良いよ。目、覚めたみたいだし……ただ、やっぱり睡眠は

人間の三大欲求の一つだから、眠ったほうが良いよ。薬、貰ってあげるから」

ね？ と、投げ掛けるとカナイは、ちらとこちらを見て、呆れたように口角を引き上げた。

「お前って時々男前だよな」

「そりゃどーも」

へろへろと笑ってから「着替えは済ませといてね」と念押しして私は部屋を出た。ぱたんつと後ろ手に扉を閉めて、溜息一つ。

—— …… 知りたくないわけじゃないじゃん。馬鹿……。

かつんつと廊下を蹴っても何も変わらない。私は、きゅつと下唇を噛み締めて頭を振ると気分を切り替えた。

「—— …… というか、エミルはどこで作業してるんだろう？」

とりえあえず、部屋をノックしてみたけど返事はなかった。ということは、医務室かな？ とぼとぼと進めていた足を早めて殆ど走るように廊下を突っ切った。

(3)

—— …… コンコン。

「どうぞー」

当たりだ。医務室の扉を叩けば中から聞こえてきたのはエミルの声だった。私は、ほっと胸を撫で下ろし扉を開く。

「ああ。マシロ、どうしたの？」

「エルリオン先生は？」

「うん、ちよっと出てるよ。僕がお留守番」

そして、振り返ってくれたエミルの背後の鍋から上がっている緑の煙はなんですか？ と聞いてはきつといけないんだよね？

「えっと、カナイが起きちゃったから……まだ、熱下がってないし、眠れなさそうだから……薬を」

そついいながらエミルに歩み寄る。

「あれ？ もう起きちゃったの？」

「えっと、その、私が叩き起こしちゃって……」

「ごによごによと俯いて告げた私にエミルは「そつ」と相槌を打つて、多分微笑んだ。ザーっと同時に水の音がする。

「何か怖いことでもあった？」

俯いたままの私の頬に掛かったエミルの手が冷たかった。石鹸の香りが鼻腔を擦る。

ぴくりと肩を強張らせると「冷たかった？」とエミルが笑った。う、駄目だ……。

「――……マシロ？」

我慢出来なくて、私はエミルの胸に額を押し付けて息を殺した。エミルは少しだけ驚いたようだったけど、直ぐにそっと抱きとめてくれる。

「カナイ、凄くうなされてて……私、堪らなくなって」

「うん」

「踏み込んだじゃいけない距離が分からないよ」

「――……うん」

ぼろぼろ零す私の愚痴に、エミルはただ優しく相槌を打って頭を撫でてくれた。ぐちゃぐちゃになっていた心が少しずつ、穏やかさを取り戻す。

「私も男の子だったら良かったのに」

すんつと鼻を鳴らしてそう締め括った私に、エミルが「それは困るな」と苦笑する。

ひとしきり慰められて、私は医務室をあとにした。

「ただいま」

「遅かったな？」

もう既にいつもと変わらない感じでベッドのベッドボードに背中を預けて、本を捲っていたカナイに眉を寄せる。

「寝てなくちゃ」

「お前が戻るのを待ってたんだろ？　なんかもう熱なんて久しぶりすぎて、脳細胞が半分以上死滅したような気がする」

世界の終わりのように口にしたカナイに私は、いいすぎだよ、と笑う。

カナイから本を奪い取って、代わりに運んできた薬を渡す。本を机の上に置いてから、ふと気がつく。

「なんかテーブルがすっきりしてる」

「アルファが戻って『残りですよ！』って食堂に持って行った」

カナイが薬を呷りながら説明してくれたことに、溜息。本当にアップルパイ作ってもらったつもりだったんだね、アルファ……。

「お前も、もう部屋に戻つとけよ。見る夢までは制御できない」

出てきた欠伸を噛み殺して、そういったカナイに私は素直に、こくんと頷いた。

「いや、別に居ても構わない」

……どっちだ？

カナイの真意を測りかねて首を傾げれば「なんでもない」と纏めてカナイはさっさと横になってしまった。

んー、つまり、居て欲しいんだよね？

そういう結果に行き着いて、私は部屋に居座ることにした。

「――……もし」

「うん？」

こちらに背を向けたまま、ぼつりと口を開いたカナイに相槌を打つ。

「もし、俺が死んで、誰かが俺の種を飲んで、お前の前に同じように”俺”だといって出てきたら、それは俺？」

「……大丈夫、風邪くらいじゃ死なないから」

「ごによごによと理解しかねるカナイの問い掛けに、私は小さく肩を竦めてあつさりと答える。手洗い盆に新しく水を張り浸したタオルを固く絞ってカナイの傍に寄った。

「別にここじゃ珍しくねーよ。今日こうしてても、明日には消えるなんてこと……ぶはっ！ 冷てっ！」

私は、むっとして、タオルを広げるとカナイの顔全体に、ぼそつと落とした。カナイの慌てる様楽しい。

「そんなのカナイじゃないよ。じゃあ、私がもし死んで私……」

いいつつ黙する。私は種にはならない。多分。だから、この人

たちはみんな私の代わりはないと思ってくれる。本当はみんなの代わりだって誰にも出来ないのに、私だけが常に浮いた存在で、異世界人だ。

「悪い、別にそんなつもりでいったんじゃない」

ぺいっと濡れタオルを弾いたあと、カナイはしょぼんとしてしまった私の頬に、つつと手を伸ばし指先で触れる。とても不安げなその所作に、じわりと優しい気持ち広がってくる。大丈夫だと伝えるようにゆっくりと暫らく目を伏せたあと、顔をあげれば、ふとカナイの表情も緩んだ。

そして改めてゆっくりと口を開く。

「ただ……俺は自分の失敗で、殺したことがある」

どくんつと心臓が震えた。驚いたのも確かだけど、なんというかカナイが口にしたことは、きっとカナイの闇の部分だ。

『マシロがそんなに遠慮することないよ。知りたければ聞くと良いと思う。それを迷惑だなんて、僕らは思わないと思う』

エミルはそういつてくれたけれど、私はやっぱり自分から問い掛けることは出来ない、そう思っていた。

「俺が大罪人だって、いったことあるか？」

私は静かに首を振った。

「昔、禁忌に、禁書に手を出した。解いてはいけない魔術を紐解いたんだ。俺は馬鹿で思い上がっていて、自分の力を過信していた。」

出来ると……俺なら、いや、逆に俺でないと成せないと思った……」

「——……カナイ」

「その失敗の代償に俺は殺した。あいつは俺を生かすために自分を殺した……今でも、忘れられない。寝るのは嫌だ……それを思い出すから。馬鹿みたいに満足そうなあいつの顔を思いだす」

薬からくる睡魔から逃げるように瞳が泳いでいる。目を開けているのが辛くなってきたいるのだろう。私は、そつと傍に放られたタオルを畳み直して、額から瞼まで全て覆うようにそつと被せた。

はぁ……と細く長い息を吐き、カナイはやや閉口した。そして、ようやっと音になっているような息声で続ける。

「俺はもう、間違わない……間違え、ない……大丈夫、だか、ら……逃げるな、よ……」

意識が朦朧としているのだろうと思う。きゅっと私の手を握るカナイの手が熱い。私はその手を握る手に力を込めて、空いた手を重ねる。

「大丈夫。大丈夫だよ……カナイはもう、何も失くさない。カナイはもう間違えないよ」

だから、早く良くなつて。と締め括って身体を伸ばし、額の夕オールの上からキスを落とす。もう、カナイから返事はなくて、静かな寝息だけが部屋の中に響いた。

——……こんな殊勝な弱々しいのは、らしくない。

カナイのそういう部分を認めないわけじゃないけれど、それを含めてカナイなのだと思うけれど、そうやって自分を責め続けること

しか出来ない彼はとても生き辛いと思うから。

せめて体調の回復するまでの間くらい、良い眠りに恵まれるように願って、私はカナイの手を握り締めていた。

でも結局そのあとは私も眠ってしまって、カナイがゆっくり休めたかどうかは定かではない。

ただ、私の寝起きが最悪だったことだけは、是非とも強いいた
い。

部屋中にアップルパイとオレンジシフォンの甘い香りに満たされて、その胸焼けしそうな香りで目が覚めたのだから……。

ほんの少しカナイの本質に歩み寄れた満足感もあっさり吹き飛んでしまうインパクトがあった。

「ちょ、アルファ……その量どうするの？」

「僕たちが食べるんですよー、はい、マシロちゃんの分もあります」

「—— ……そ、か……つくしゅん」

そして、カナイ回復時と同時に私は風邪を貰って寝込み、種屋に
連行された…… ———

おまけ（カナイサイド）

気分は最悪だった。

どこの馬鹿が、この真冬に氷の張った湖に飛び込むっていうんだ。はつきりいえば、自己嫌悪。

マシロは自分のせいだと思ってるようだけど、実際はそうじゃなくて、俺の油断だと思う。

熱を出したのなんて、いつ以来だろう？

魔術師は体調の良し悪しが術に如実に現われるから、どちらかといえばその管理には徹底したものがあつた。だから、ちょっとやつと無理した程度では寝込んだりしない。

それが、こうも簡単に寝込むことになるなんて正直怠けている証拠だと思う。

だから落ち込んでいるというのに、静かにそうさせてはもらえないことに僅かな苛立ちを込めて、アルファとマシロに当たってしまった。

アルファはいつも通り返すが、マシロは凹んでいる。

なんとか、取り成してやるべきだとは思っけれど、そんな余裕もない。

俺はなんとか二人を追い出すことに成功して、枕を背もたれにしてなんとか上体を起こす。

そして、はあと溜息を吐いた。

口から吐き出される息が熱い。

魔力が漏れ出ないように体内に集中もしないといけないのに、頭もぐらぐらする。大聖堂に居たころだったら確実に隔離されていた。

いや、寧ろそのほうが楽だ。

「どう？ 全然駄目っぽいね」

二人が出て行ってやっと一息ついたと思ったら、エミルが薬湯を持って入ってきた。

「隔離しても構わないぞ？」

「ここは図書館だよ？ 魔術防壁のある部屋なんてないよ。それに、そんなことしなくても大丈夫でしょ」

あっけらかんとそういったエミルは「はい、飲んで」とゴブレットを押し付けてくる。あまり食が進むような香りを発しているとは思えないそれに眉をひそめたが、飲まないという選択肢は存在しないだろう。

「風邪には休養が一番だよ。ゆっくり休まないと……」

あまり寝てないんじゃない？ と続けたエミルの質問から逃げるように、俺は薬湯を呷った。見た目通りの味に、僅かに咽る。

「少し強めの睡眠導入剤を混ぜたから、ゆっくり眠ると良いよ」

「……っ、余計なこと……俺は少しくらい寝なくても大丈夫だ」

毒づいて、げぼつと咳き込んだら、窓硝子がぴしつとひび割れる音がした。

いった傍からこれでは説得力がまるでない。

俺はエミルから逃げるようにベッドに潜り込んだ。

直ぐに瞼は重くなり、十も数えないうちに俺は眠りに落ちてしまった。滅多に取ることのない、深い深い……底のほうに落ちていく……。

—— ……夢を見た。

もう幾度となく繰り返される夢。

俺なんかを庇って、俺なんかを助けて……「良かった」とそう馬鹿みたいな台詞を繰り返される……悪夢以外の何ものでもない。

どうして、俺が罰を受けなかった。

どうして、俺が傷付かなかった。

どうして、俺が種に還らなかった…… —

全ての疑問の答えを俺はまだ見つけられない。
だから、ただ、ただ、繰り返し見る。

肉体が乖離していく瞬間。

俺は何度も夢の中であいつを殺している。

しっかりと抱きとめたはずなのに……この手には何も、残ら、ない……。

いつもは無音の夢の中でただ叫び続けるのは、俺だけなのに、悲鳴のような声が聞こえた。

「――……っ!」

はた、と目を覚ませば、視界が揺れていた。地震……というよりは……

「……っ痛……痛い、馬鹿、脳みそ出る」

なんとか声を絞り出せば、やっと揺れが止まり解放される。ベソをかいたような顔で人の顔を覗き込んでいたマシロに毒気を抜かれる。

薬で寝てただけなんだから、そんな必死に叩き起こさなくても、死にやしないっていうのに変な奴だ。

わけを問質せば、りんごを剥いた。というし……そんな取ってつけたような理由。誰が信じるんだよ。

その証拠のように、慌てて差し出されたりんごにはナイフが刺さっていた。

うなされていたかと問えば、遲疑逡巡したあと頷いた。

繰り返される台詞も、きつと一緒だからろくなことはいっていないだろう。だから寝るのなんて嫌なんだ。そのことについて、なんだかなんだと問質されるかと思ったら、あっさりと引いた。

女ってこういうことに、根掘り葉掘り首を突っ込みたいものだと思うってんだけど、違うのかもしれない。

だからか、こいつが近くに居るのは違和感ない。

エミルのところへ行くという、マシロを見送って俺は念を押された着替えを済ませることにした。

「カナイさーん。マシロちゃん、苛めたんですか？」

まだ、ぼーっとしている頭をなんとか起こして着替えをしているとアルファがひょっこりと戻ってきた。

俺は「は？」と首を傾げつつ、手近にあったタオルを放り投げてやる。

「なんかしょぼしょぼしてましたよ？ マシロちゃんは女の子でカナイさんよりずーっと複雑に出来てるんですからね。気をつけてあげてくださいねー」

受け取ったタオルで、顔を拭きながらぶつぶついつつ浴室に消えていく。あいつこそ風邪を引け。

それにアルファにそんなこといわれる日がくるとは思わなかった。

そのあと、ぐだぐだいうアルファを部屋から追い出すことに成功したものの、マシロが帰ってこなくなった。

サイドボードの上に載せてあった本を手に取り暇を潰す。

『マシロちゃん、僕らにどんな一面があったとしても、変わらないと思いますよ?』

いい残したアルファの台詞を何度も繰り返す。

誰にだって過去があるし、懺悔したいこともあるだろう? 懺悔

……か……誰かに許されたいなんて思っていないはずなのにそんな言葉が脳裏に浮かんで苦笑する。

「ただいまー」

「遅かったな?」

マシロが運んできた薬に口をつけ、ベッドに潜り込む。直ぐに襲ってくる睡魔に抗いながら、ぼつぼつと零す。熱で頭はぼーっとするしろくなことは口にしないだろうということは分かっていたけれど……また、きっと俺はあの夢を見る。

そうすれば、安眠はまたマシロによって遮られ……その繰り返しをすることだろう。

マシロの小さな手が燃えそうなくらい熱くなってしまっている俺の手に絡む。水を使っていたせいで、冷たくて心地良い。

—— …… ああ…… 離したくない……。

ふと脳裏に浮かび、直ぐにそれだけで頭の中は一杯になってしまった。その一心で、俺は指先に力を入れた。

ぎゅっと握り返された手に安堵し、泣き言のようなことを口にし

てしまったかもしれない。

—— ……俺は、もう、何も失くさないし、何も間違えない……。

「俺は、間違えない」

声にはならなかった。でも、口内で繰り返した言葉に心が風ぎいてくる。とても穏やかな気持ちに俺はどういうわけか『美しいとき』という言葉思い出した。

馬鹿馬鹿しく、絶対にこんな俺には巡ってこない代物であると思っていたのに……指先が届く場所に、声が届く距離に『美しいとき』を分け与える少女が居る。

散々否定してきたものに、俺は今心の底から癒されたいと思ってしまった。

本当に……俺はなんて自分勝手なんだ、ろっ、な……。

そして俺は夢も見ることもない深い眠りを得ることが出来た。

しかし、その代償としてマシロに風邪がうつってしまい全員に責められた。黒猫からは命の危険すら感じ取った。本当に俺が責められること、なのか？ 不満にも思ったが、それ以上に満たされていたから、甘んじてその責めを受けた。

おまけ（カナイサイド）（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

このお話にはもうひとつおまけが存在しますがR指定となります。

(<http://www11.plala.or.jp/sshappy/been/ooo1.html>)

上記アドレスの「ooo」部分をパスに置き換えてアクセスしてください。

もし、読んでみたいという、読者さまがいらっしゃいましたら、拍手お礼お返事先としてリンクさせていただいている『ちよこつと広場』<http://syousetunarou.seesaa.net/article/184610087.html> ブログにてパス請求方法を記載しますので、それに則って気軽に^ご請求ください^^

(1)

「うーん」

私は図書館寮までの帰り道を急ぎながら、小さく唸った。

今日も、クリムラでおやつを貰ってしまった。このまま寮に戻って夕飯のあとつてなると夜食なんだけど。

おばさんはとても良い人で、帰りにはいつも何か持たせてくれようとする。売れ残りとかならまだあれだけど、時には「折角手伝ってくれたんだから」とわざわざ用意してくれるときもある。正直それは良くないよね。

私はギルドの依頼で、お店に入っていて、ギルドからはちゃんと報酬を貰っているのだ。それなのにそれに上乗せするように貰っちゃうなんて申し訳ない。

—— …… 本当、みんな良い人過ぎるよねえ。

まあ、貰ってしまったものは仕方ないし有り難くお腹に納めちゃうのだけど——主にアルファが——と思いながら私はカーティスさんに挨拶して、図書館の奥へと進んでいると、少し奥まったところで珍しい組み合わせに出会った。

彼らも丁度、出くわしたところらしい。

「珍しい方が声を掛けてきますね？」

「—— …… 忘れてるかも知れないけれど、図書館は私の職場だけだね？」

ラウ先生とブラックだ。ラウ先生は私にも敬語で接してくれるのに、ブラックには違うんだと始めて気がついた。古い知り合い、とかなのかな？ 立ち聞きもなんだし声掛けようと思ったのになんとか戸惑われた。

「ねえ、前から聞きたかったんだけど……今良い？」

につこりといつも笑顔でそう問い掛けたラウ先生にブラックは物凄く面倒臭そうな顔をしながら「マシロが戻るまでですよ」と了承した。その承諾に気を良くしたのか、ラウ先生はブラックの隣に腰を降ろして話を続ける。

「マシロの何がそんなにみんなを夢中にさせるんだい？ 全てを持つ種屋まで虜にするほど、とは、正直思えないのだけど？」

ラウ先生のあっけらかんとした質問に、私の足は完全に動かなくなってしまった。聞かないほうが良いのは分かる。でも、自己評価が限りなく低い私としては是非とも聞いて見たい……立ち聞きだとしても……。

ブラックは膝の上で開いていた本を、ぱすつと閉じて顔を上げると不思議そうにラウ先生を見た。

尻尾が好奇に揺れている。ラウ先生の質問の本質を探っているのだろう。

「貴方はマシロに好意を抱かないんですか？」

物凄く意外そうにそう聞くほうがどうかしていると思う。

「え、ああ……嫌いじゃないけど、どちらかといえばよく動く玩具

を見ているみたいだ……時折、疎ましくさえ思える」
「ほう……」

ブラックは瞳を細めて口元を緩めた。怒っているわけじゃない、どちらかといえば楽しんでいる。が正解だと思う。

「質問を摩り替えないでくれる？ 私の話じゃないはずだけど……、大体、顔の造形も飛びぬけて美人とも、体型も……」

そんなの自分が一番分かってます。皆まで口にしなかったことに余計に傷付く。

「そうですか？ マシロは全て丁度良いと思いますけど。それに造形など、時と共に変化するものです。一番不確かなものだ……」

いったあと、ブラックは「いえ……」と零して首を振り苦笑した。

「この世界の全ては、不確かですね。なんだって変えることが出来る……内側さえも……ですが、もって生まれた素養の強いものは案外安定しているものです。そしてより確かなものへ惹かれる……」

ブラックは、ずっと立ち上がって手にしていた本を消してしまおうと、腰掛けたままのラウ先生をちらりと見て微笑んだ。

「マシロの内側は誰にも変えることが出来ない。全てを持っている、私にも決して変えることが出来ない……本質的な部分で、それに惹かれない貴方は、やはり作り物、なんでしょうね？」

では、マシロを待たせているので、とブラックは好戦的に微笑んでカッンッと踵を鳴らすと真っ直ぐ私の方へと歩いてきた。

立ち聞きしてしまっていた申し訳なさと、ラウ先生の表情に落ちた影が気に掛かって声をつめてしまった。ブラックは私の真正面に立って、行きましよう。と私の背を押した。

「あ、あの……」

「気にしないで構いませんよ?」

廊下を歩きながら、謝ろつとすればあっさり遮られた。

「少し遅れましたけど、マシロが見つけてくださったのには気がついていましたから」

「う……ごめん。直ぐに声掛けたかったんだけど、その……私も知りたかったから」

「ごによごによと、お土産の箱の持ち手をぐりぐりと苛めながらそういった私に、ブラックは首を傾げた。

「いや、うん。なんでもない。それよりラウ先生、傷付いた顔してたけど」

「別に良いんです。マシロのほうがアレに『疎ましい』なんていわれたとき、ショックを受けていましたから」

—— ……う、お見通しですね。

「それに傷付いたところでどうということはありません。ラウもある意味変わらないものですからね」

いつてくすくすと笑うブラックは酷薄だと思う。もうつと眉を寄せた私に「失言がありましたか？」と不思議そうにする。

本当にこの猫は、私以外の感情の動きなど、どうでも良いのだろうなと実感すると怖くもある。それなのに、嬉しいなんて思ってしまったほうが勝る私は、いいかげん終わっている。

「マシロちゃんっ！ お帰りなさいっ、遅いから迎えに出るところだったんですよ」

寮棟の廊下の先から勢いよく駆け寄ってきたアルファは、そのままの勢いで私に抱き付こうとしてブラックにあっさり片手で遮られた。

がつつり額を掴まれ圧しとどめられているのになお暴れる。

流石アルファ。

常に直球勝負。

「えーもう、なんでブラックが居るの？ マシロちゃんにハーグー」

「寄らないでください」

「ぶー、いつもしてるのにーっ」

ああ……なんか、地雷踏んだっぽい。

私の溜息は誰にも気がつかれることなく、ブラックは「ほおう」と瞳を細める

と、アルファを掴んでいる手にぐぐつと力を込める。

「い、イタイイタイイタイっ」

「――……」

「痛いっ！ っていつてる、よ・ねっ！」

――…キ…ン…っ

あーあ、もう、寮の廊下で抜刀しちゃったよ。

(2)

ブラックの腕をなぎ払うと同時に、後ろに飛び片手剣を構えたアルファは、あー痛い。と空いた手でこめかみを押さえつつ、不満気にブラックを睨みつける。

睨まれているブラックは、同時に出現させたのだろう、仕込み杖をくるりと回してにこりと口角を引き上げた。

「ったく、どうして、週末じゃないのに、ブラックがくるわけ？」

「マシロの顔が見たくなったので寄っただけです」

「凄い迷惑っ！」

迷惑なのは多分あんたたち二人ですよ！ と私がいつでも聞かないだろう。二人がじゃれているのは分かるけど、寮棟は私たちだけの場所ではないのです。他の寮生への迷惑も考えて欲しいよ。

私は苛々としつつ、牽制しあっている二人の間をあっさりと通り過ぎた。

「「え」」

と二人同時に零したのがおかしい。慌てて二人とも私の後ろを追い掛けてくる。

「ねえねえ、マシロちゃん。その箱中身何？」

ひょこりと顔を覗かせて訪ねてくるアルファに私は箱を掲げて告げる。

「これ？ これはね、シューロールケーキだよ。シュー生地で生ク

リームとイチゴを巻いてあるの。今の一番の売れ筋」

私の説明に瞳を輝かせたアルファに「どうぞ」と箱を持たせてあげる。

わーい！ やったーと素直に喜ぶアルファを見ると、怒る気が失せるから役得だと思う。

「じゃ、僕先に戻ってお茶の準備しますね」

といいながら既に駆け出していたアルファを見送りつつ廊下を歩き始めると「ブラックも一緒に」と話を振れば、当たり前のようにゆるりと断られた。

「部屋まで送ったら今日は戻ります。本当にマシロに会いに寄っただけなんです」

そっか……と、口にしてそれ以上は口に出来ない私はやっぱり可愛くない。本当は、そういつてくれるのが凄く嬉しい。寸暇を惜しんできてるのが嬉しい。直ぐに帰っちゃうのが凄く寂しい。我儘をいうなら、もっと居て欲しい。

私は結局そのどれも口に出来ない。なんかもう自分自身にがつかりだ。

そんながっかりづくしな私の手をブラックはそっととって、指を絡めるときゅつと繋いだ。ふと、顔を上げれば、ブラックと目が合いにつこりと微笑まれる。

「やはり、お茶を頂いて帰ります。もちろん、マシロの部屋で」

あっちは、待たせておけば良いでしょう？ と、続けたブラック

に私は、ほつと胸を撫で下ろし自然と頬が緩んでいた。

私は到底自分に自信なんて持てない。

ラウ先生が思うように「どうしてだろう？」とこの手が解けてしまったとき、一人になったときいつも不安を抱えている。

「――……私も不安ですよ？」

刹那舞い降りた沈黙を破った一言に私は「え？」と間の抜けた声を上げた。隣を見たけどブラックは、ちらとだけ目を合わせて直ぐに顔を上げてしまった。

「未だに、どうしてマシロが私を選んだのかさっぱりです。見目悪いとは思いませんし、地位も権力も持ってますけど、マシロの周りはその手の輩ばかりですからね。だから私がその点で特に秀でて居るとは思えない……」

「エミルは分かるけど、アルファやカナイもってこと？」

ふと素朴疑問を漏らせば、呆れたような溜め息が落ちて「ほら、興味ないでしょう？」と苦笑される。いや、だって、みんなそんな風にはとても。

「アルファもカナイも上級職の中でもかなり上位ですからね。マシロの我俣を叶えるくらいの余裕はあると思いますよ」

いったあとで慌てたように「あ、でも、私が一番マシロの我俣に答えられますよ」と付け加える。

どんなツボで慌ててるのか、おかしいっとならない。思わず、ぷつと噴出した私に、ブラックは尚不思議そうな顔をした。

「私、我俣大王みたいだよね」

「我俣は女性の特権でしょう？」

誰情報かはあえて聞かない。なんとなく想像つくから……。

「大体、マシロはその我俣が少ないんですよ。だから私も本領を發揮できないじゃないですか。いくらでも聞いて差し上げられるのに」

……その不貞腐れ方はどうなんだろう？ 私はごめんなさいといわないといけないのかな？

「マシロが毎日会いに来て欲しいと望めば、幾らだって来ますし、いつそ同居しますよ？ それに……」

と続くブラックの話を聞きながら私は到着した自室の鍵を開ける。手を離してくれないから開け難いことこの上ないけれど、私も離す気にはなれない。

かちやり、と開錠の音がすれば、ブラックは「あ」と零す。何？ と問い掛けつつ扉を開けば「いえ、なんでも」と首を振ったけど……もう着いちゃった。とでもいったところだろうか？
耳が……へによんつと髪の間隠れてしまっている。

—— ……どこまでこの人は可愛いんだろう。

さっきの話だって、自分自身に自信がないわけじゃないのに、私に愛される自信はないなんて……欠点だらけの私からいわせてもらえれば、有り得ない不安だけど、きっとブラックは真剣だ。

だから余計に可愛い。

こう、もう、がしつと抱えてわしわしわしって撫でたいくらい可愛い……ってあれ？ 私、猫だから好きなのか？ いや、ブラックだから好きなんだよね？

あれ？

「マシ口って考えていることが、物凄く顔によく出ますよね？」

「え？」

「今、猫の姿にならないかな？ って思ったでしょう」

拗ねたようにそういつて「なりませんからね」とさっさと部屋の中へ入ってしまう。

こうやって、一緒に居ればちゃんと愛されていると実感できるのに、離れたとたん不安になるなんて……一種の刷り込み？ それとも、洗脳かなあ……。

自分でいった通り、お茶を準備してくれ始めたブラックの尻尾をくいつと引っ張った。

「なんですか？」

「やっぱり一緒に良いよね」

いつて抱きつけば、短く呆れたような溜め息を零される。

「貴方がそれをいいますか？」

「だって、やっぱり、ブラックのこと好きだなーと思ったらいいたくなっただもん、仕方ないよね」

うん。確実に洗脳されてるんだと思うよ。脳内常春だよ。悪いか。誰にいうでもない悪態を吐いて擦り寄ればブラックは当たり前

ように受け入れてくれる。

「マシロって少し自虐的ですね？」

「……そうかな？」

「そうですよ。だって、その答えに行き着くくせに一緒に住むのはイヤなんだろう？」

向き直って、私を抱き留めながらなんだか納得行かないと零すブラックに、私は改めて考えてみたけど、やっぱり一緒に住むのは、図書館の生徒でもあるし、ちよつと違う。

今はまだ、こうして、ふと強く実感できる気持ちがとても心地良くて、私を充実させてくれる。

だから、つい「そうかもね」と答えれば、ブラックは頬を摺り寄せてきて、当然のように私が顔を上げれば柔らかな口付けが降ってくる。

—— …… ああ、やっぱり好きだな……。

深く強く実感して、瞼を落とせば、少しだけブラックが笑ったのに気がついて、音だけで問い返す。

「いえ、本当にマシロは我侭で可愛いなと思っただけです」

真綿のように柔らかい雰囲気満たされる、今がとても幸福だ。

ケーキが腐る！ といって扉を蹴破ってきたアルファとブラックが再びひと悶着始めるまでは……の話だけれど…… ——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5907m/>

白蒼月外伝～二つ月の見る世界（種シリーズ）

2011年6月6日17時04分発行